運命の扉

美玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
運命の扉

【Ｎコード】
Ｎ２０３６Ｘ

【作者名】
美玲

【あらすじ】
誰かと誰かが出会い新しい運命の扉が開かれる。
そんな運命によって導かれ出会った２人。
これからどんな運命の扉が開かれるのか。
※ちょいシリアスだけど明るくいきます（笑）

1、はじまり（前書き）

遅くなってごめんなさい。
前のとは違い純愛で長き恋愛を描きたいです。

1、はじまり

中学卒業の2か月前
高校受験が終わった頃彼女は転校してきた。
卒業前で思い出作りを始めるクラスメイト達と違い
彼女は誰とも話をしない

いつからだろうか？
そんな君を目で追い始めたのは…
君はどうして転校して来たんだ？
君の全てが知りたい…

三学期の始業式

ガラガラガラッ

騒ぎたつ教室内にドアの音が響く。
すると皆は一斉に席につく。

「みんな、冬休みは楽しかったか？」

担任は男っぽく無駄に熱い先公だ。
休みあけに少しウザく感じるのは、俺だけだろうか？

担任はイマイチ反応しない生徒達を無視したまま話を続ける。

「良い知らせがあるんだ。
実は今日から君達と一緒に学ぶ転校生がいる。」

これには皆がざわめき始める。
そんなざわめきに納得しながら担任は外に向けて、手招きをする。
みんなの視線が注目する中で入ってきたのは女の子だった。
男子がヒューヒュー言っても全く表情を崩さないクールな女の子

担任の指示で自己紹介を始める。
そう思ったがそれは実に呆気なかった。
「織田(おだ)　杏(あん)です。」
たった6文字で終わってしまったから。
「…えっと
じゃあ織田の席は1番後ろの所な。」
あまりの短さにクラス全員
そして担任までが驚き気まずい朝礼になってしまった。
今、気づいたけど後ろの席って言うのは俺の隣の席だった。
席までの道のりを歩く間に彼女に話しかける者は当然いなかった。
何も話さずに席に着いた彼女
いや杏は、話したくない
そんな雰囲気を醸し出していた…
それでも隣の席の宿命は守るべきだ。

「俺さ、東山星輝(ひがしやませいき)って言うんだ。
よろしくな
わからない事があればきけよ！」

少しこっちを向いてくれた。

「どうも。」

まぁ素っ気ない事に変わりはないけど
でも素っ気ないよりも1番に思ったのが、彼女の圧倒的な容姿だった。
これで少しでも微笑めば誰でもイチコロなのにな
そんな事を考えさせられるほど美人だった。

朝礼が終わり担任が出ていくと騒ぎ出すと同時に杏に視線が集まる。

なのに、誰も話しかけない
そんな空気を破ったのが杏の前の席の女の子だった。

「私、上田雪実(うえたゆきみ)って言うんだ。
仲良くしてね。」

2つぐくりにメガネで何事も一生懸命な女の子。
そんな女の子の肩に金髪の男が手をおく。
女子の視線のほとんどは、こいつの物
まぁ3割ぐらいは俺の物だけど

「俺は、向井葵(むかいあおい)です。
雪実は迷惑かけっぱなしだと思うから
俺に頼ってね。

杏ちゃん。」

さりげなく手を差し出した葵だが杏は一瞬見ただけで、スルーだった。

「おい葵、またお前の毒牙にかかったら可哀想だろ。」

葵と俺と雪実はよく一緒にいる1番仲の良いダチだ
葵と雪実は幼馴染みで
葵と俺は幼稚園からのダチだから

「そんな堅い事言うなよ。
星輝だって杏ちゃん見たら惚れちゃうだろ？」

甘い囁きを無視し星輝は杏の方を見る。
その時
一瞬
1秒も無かったけど
杏と初めて視線があった…

すいこまれそうな瞳
思えばこの時から俺は杏を見つめ続けてたいたのかもしれない…

授業中は特に会話する事もなく
休み時間は話しかけても何だかんだで流され、何もきけず
放課後になってしまった。

「ねぇねぇ今日の放課後
織田さんの歓迎会しない？

ギリギリに転校して来て寂しいと思うけど、仲良くしようよ。」
クラスの女子の中心の三田夏葉(みたなつは)が皆に呼びかける。
「おっ良いじゃん。
行こうぜ。」
星輝が賛成すると夏葉の表情が一気に明るくなる。
星輝が言い出すと葵も賛成し次々とメンバーが集まってくる。
「あれ織田さん今日予定ある?」
鞄に荷物をつめ今すぐにでも帰ろうとする杏に夏葉は話しかける。
杏はバレずに帰りたかったのか、ため息をしながら返事をする。
「いらないから。
歓迎会とか。」
きっぱりと言いきった事でクラス内の雰囲気が凍りつく
夏葉は急に言われた一言で表情が固まっている。
「そんな言い方しなくても…」
クラスメイトが夏葉を構うようにボソッと呟くと、またため息を吐く。
「貴方のエゴの為に私を使わないで。」
さらに静まる空気を杏は無視して教室を出ていった。

杏が出ていった教室では夏葉が悔しそうな顔をしていて、早速いじめ計画がつくられてる。
女子の大群のいじめのターゲットは杏が最初では無かった。

このクラスには少し前から苛められてる男子がいる。
そいつは佐々木（ささぎ）という男子で割と元気なやつだった。
佐々木は夏葉に怪我をさせて初めてのターゲットとなった。
始めは反抗し、男子も止めにはいったが女子は止まらなかった。
いつまでもいじめ続け、今では学校に来なかったり来ても保健室にいたり様々だ。
でもさっき教室に居た佐々木は笑ったんだ。
新しいターゲットの誕生に

杏が気になって仕方なかった星輝は杏を追って教室を後にした。
怒りを煽る事も知らずに…

ダッシュで自転車をこいでいく。
今日は風が生暖かい日だった…
嫌な予感がする。

少しこいだ所で前の方に地面にしゃがみこんでいる人が目に入る。

「織田！！」

近寄り身体を起こすと身体はかなり熱かった。
意識はあるもののかなりぐったりしている。

「大丈夫か？」

声に反応し少し身体を離そうと杏が力をいれだす。

勿論離すつもりはないけど

「離して…
大丈夫だから。」

星輝は杏の言葉を無視して自転車に乗せる。
自分の腰にきちんと手をまわさせて、もたれさせる。

「大丈夫なわけねぇだろ！
つかまってろよ！！」

星輝は杏を気遣いスピードをゆっくりめに自転車を走らせた。
杏はしっかり手に力を入れながらいつの間にか眠りに落ちていた。
家の場所はどうしてもっているのかはわからないけど、地図を見ながらつきとめた。

信号で止まっている時、後ろをみると杏は心地良さそうな顔をしていた。
学校で見せた無表情で冷たい顔では無く、優しい顔を…

「体調が悪いなら、そう言えばいいのにさ。
そうすれば夏葉の怒りを買うことも無かったのにな。
まぁ俺がどうにかするけどな…」

家につくと杏の母親は必要以上の心配をしていた。
過保護とかを超えるぐらい
そして超感謝された。

家につき携帯を開いてみる。
すると葵からのメールが入っていた。

～杏ちゃん追いかけちゃって。
やるー
俺の彼女にするつもりだったけど星輝が惚れたなら譲るわ。～
途中までの内容は無視して最後の部分だけ読む。
～お前が出ていった後さ大変だったんだぜ
夏葉が泣いてさ。
男からしたら、わざとらしくて笑えるけどな。
でも雪実以外の女たちはヤベェよ。
マジ怒ってる。～

ほとんどわかってた事だけど、やっぱりか…

夏葉は美人で性格が強い
そして、何より策士で自分の使い方が上手い
煽り方を心得てる
まぁ惚れさしかたは知らないみたいだけどな。

メールして止めようかと思ったが明日直接言う事にした。
でも簡単には行かないだろうな。
あいつは恐いし嫉妬深いから
俺が杏を構えば、より怒るだろうしな

翌日、少し早めに学校へ行くと杏はまだ来てなかった。

「星輝、おはよう。」

朝から笑顔の夏葉が話しかけてくる。

「おす。」

まだ何か話したそうな夏葉を無視して星輝は自分の席に向かう。
席に着くと、雪実、葵がやって来る。
それに気づき隣の杏の席をみると、机の中が紙くずでいっぱいだった。

「どうすんだ？」

葵が心配そうに尋ねてくる。
葵も思ったんだろう。
杏をターゲットにしたくないって
そこらへんは美人の特権だけど

「とりあえず出すか？」

雪実がホウキや塵取り、
そしてゴミ箱を持ってきてくれたので、急いで中身を撤去する。
間に合ってくれ！
杏が来るまでに終わりますように

一生懸命片付けていると夏葉がやって来る。

「星輝、何してるの？？」

わざとらしくきいてくる夏葉に星輝はハッキリ告げる。

「織田の事も佐々木の事も

止めてくれないか？」
夏葉は織田と言った瞬間嫉妬に歪んだ顔をした。
「私、何もしてないよ。
何も知らない。」
そんなの嘘に決まってるけど星輝はあえて何もきかなかった。
時間の無駄だって思ったから。
あと少しという所で予鈴がなり杏が登校してきた。
いっそ休みだったらと思ったが、そんな願いが叶う事はない。
必死に紙くずを片付けてる3人
杏を見ながらニヤニヤ笑う女の子たち。
杏は席にやってきて片付けてる3人に声をかける。
「今後は何もしなくていいよ。
私は平気だから。
それと東山くん
昨日はありがとう。」
そう言って杏は残りの紙くずをテキパキと片付けて席についた。
そんな杏の表情を面白くない
と、1番に感じたのは夏葉だった。
でも夏葉は何も話さない。
昨日庇った子がまた夏葉の変わりに告げる。

「無表情とかありえないっしょ。
ちょっとは嫌な顔しろよ。」

昨日の控えめな言い方と違い女の子は勢いよく言ってくる。
けど杏はそんな事で怯む女じゃなかった。

「腐った奴ら。
こんな事したって意味ないじゃん。」

それがさらに怒りを買う。

「むかつく奴の顔を見たくないんだよ。」

普通に考えれば喧嘩でも出てきそうな言葉
けどいじめで言うと言葉の重みが変わる。

「そんな事言ったって
あんた達が誰かをいじめて、その子が自殺したらどうすんの？
命の重みを知らないくせに、そんな事言ってんじゃねぇよ。」

さすがに今度ばかりは女の子達も返す事ができなかった。
杏が言った言葉の迫力にやられてしまったから

この日は昼休みになっても放課後になっても平和だった。
杏にも佐々木にもイタズラをする奴はいなかったから。

放課後になるとすぐに佐々木が教室を出ていく。
そんなのを見ても誰一人として気にしなかった。
…杏以外は

佐々木が出ていくのを見ると杏は鞄を置いたまま教室を飛び出す。
その異様なまでの緊迫感を感じた3人は後を追った。

佐々木を見失いキョロキョロしていた杏がどこかに走り出す。
疑問を感じながらたどり着いたのは屋上だった。

今にも囲いを飛び越えようとする佐々木
そしてそれを止めようとする杏

「死んだって何も良いことなんて無いよ！」

すると佐々木は奇妙な笑い声を上げる。

「さっき織田さん言ってたじゃん。
俺はあいつらに重みを与えたいんだよ！
あいつらに苛めた事を後悔させてやる。」

あまりの闇の深さに3人は出ていく事ができなかった…
けどそんな3人と違い杏はどこまでも勇ましかった。

「死んだら後悔を見届ける事はできない。
後悔させたいんなら生きてさせなよ！」

正義と言えば正義だが佐々木にとって、それほど辛い事は無いのではないだろうか？

「俺はもう学校に来たくない。
織田だってそうだろ？
あんな事が毎日続くと思ったら嫌になる。」

そんな弱い意見を告げた佐々木と違い杏は強く答える。
でもその意味は…深い

「嫌になんてならないよ。
私はこうやって学校に通える事が何よりも幸せだと思うから。
だからあんたみたいに命を無駄にする奴は許せない。」

杏の言葉をボソボソ繰り返している佐々木
そんな佐々木に杏は近づき抱きしめた。

「生きようよ。
生きてれば良いことが必ずある。」

佐々木には杏が女神のように思えたかもしれない
杏はそれぐらい美しかったから
佐々木はその後理性を取り戻し家に帰っていった。
杏も同じく学校を後にした。

杏は屋上を出ていく時、俺たちに気づきながら何も言わなかった。
雪実は泣いていたし
葵は雪実を抱きしめていた

杏…
君はどうしてそんなに強いんだ？
命の重み
それをどうして知ってるんだ？
友達が居なくても楽しいと言い切る学校生活

なぜだろう…
今の君の姿は誰よりも強く美しいのに

誰よりも儚く感じる

すぐに消えてしまいそうな儚さ
そんな物まで醸し出している訳はどこにあるんだ？
君は誰よりも一生懸命生きてる。

なのに君は誰よりも諦めてる
その訳は？
君はその身に何を背負っているんだ？？
君の全てが知りたい

2、近そうで遠い距離

いつかきいてみたい…
君が生きててよかったと思った事はなに？

俺は…君に出会えたこと
いっけんキザなやつとか思うかな
でも君との出会いが俺の人生を変えたんだ

翌日からエスカレートするいじめも杏の表情を崩す物は無かった。
悲しみはわかないみたいだが
怒りはわくみたいで
杏は時々、自分の席を誰かの机と変えたりしていた。
そういう時杏は決まって言っていた。

「彼女たちがやった事だから。」

止める者はいなかった
何だかんだで杏を好きな人はいっぱいいたから
それに杏の行動を正しいと思っている人もいたから

佐々木は杏に説得されてから毎日学校に来ていた。
いじめられても助けを求める事は無く、男らしかった。

「なぁ星輝
雪実と話してたんだけど
杏ちゃんが嫌じゃなかったら学校案内してあげたいなって。」

葵が言ってきた提案は珍しくマトモだった。

「いいんじゃないか？」

星輝が杏に伝えようとしたら
葵がすでに杏に接近していた。

「杏ちゃん、今日よかったら学校を案内させてくれない？
色々と不便だと思ってさ。」

どうせ断られる
そう思ったのに杏が返したのは意外な言葉だった。

「ありがとう、助かる。」

放課後４人で校舎内を回っていても余計な事を考えてばかりだった…

葵だからオッケーしたのか？
何でこんなにモヤモヤすんだよ！

「星輝、どうかしたの？」

いつの間にか星輝は皆から少し遅れていたみたいで雪実が心配そう
にきいてくる。
そんな雪実に優しく微笑む。

「大丈夫、何も無いよ。
心配してくれてありがとう。」

すると星輝の笑顔をみた葵がむすっとしているように見えた。
杏からは特に表情はよみとれなかった。

「今日はありがとう。
すごく助かった。」

葵だけに向けた笑顔じゃないのに何故かイラッとした。

4人で教室に戻ろうとしていると、杏の動きが遅い事に気づいた。
でも2人は気づいてないし気のせいかなって思って気にしない事にした。

そして教室に着くちょっと前に少し杏の身体がフラフラしてるように感じた。

「織田、大丈夫か？」

雪実と葵は仲良く歩いていて聞こえないみたいだ。

「何が？
だいじょー…」

「あぶねぇ！」

ギリギリ間に合い腕で杏を支える。
星輝の声に気づいた雪実と葵も近づいてくる。

「キャー杏ちゃん大丈夫？」

大丈夫と言い張る杏に背中を向けて屈む。

「ほら、乗れよ！」

杏は意外に頑固なのか首を横にふりつづける。
その時ふと杏の言葉を思い出す。

学校へ通える事が幸せだって

「安静にしないと明日学校に来れないぜ？」

すると杏はあっさり背中にのってきた。
何で学校がそんなに好きなんだろうか？

結局この日も杏を自転車に乗せて帰る事にした。
昨日みたいに倒れたら心配だし。

「なぁ貧血ってよく起こすのか？」

今日は起きてるみたいなので聞いてみた。

「まぁたまに。」

身体が弱いのだろうか？
あんなに強気なのに…

「もう少しで着くよ。」

静寂を破るように告げた。
すると何かボソッと返事をくる。

「…たくない」

「え？
何て？」

珍しく何かを嫌がった気がする。
けど肝心な所が聞こえない。

「…帰りたくない。」

ちゃんと全てが聞こえたけど、どうしたらいいのか…

「お母さんは過保護すぎる。
すぐ学校を休めって言うし…
今日は顔も見たくない。」

たしかに少し過保護だとは思ったけど…

「大事に思ってるからじゃないのか？」

そう言うと、腹あたりをギュッてつままれる。

「いてっ」

「そんな事わかってる…
でも私は…」

何か深い訳があるのだろう…
星輝は自転車で来た道を戻りだす。

「えっちょっと…」

困惑する杏
全く気にしない星輝

「帰りたくないなら、今日は俺んちに泊まってけよ。」

いきなりの事で杏は焦りだす。
まぁ俺が原因だけどな…

「ダメだよ。
そんなの。
家族の方に悪いし。」

来るって事は嫌ではないみたいだ。
だったら問題はない

「いいよ。
言っとくし。
一晩の話だしな。」

星輝は一旦自転車を止めて電話をしだす。
もしかしてと杏が考えてると

「母親が良いってさ。
後は織田しだい。」と、予想通りの答えが返ってきた。

しばらく杏は考えてるみたいだった。

「じゃあ一晩お世話になってもいい？
ケンカの後で会いたくないから。」

どうしてケンカしたのか
とか
謝れ
とかは
あえて言わなかった。
数日杏を見ていると何かありそうだと思ったから。
この問題はきっとまだ俺がかかわるべきではない

家につくと杏は礼儀正しく母親に挨拶をした。

「はじめまして、先週転校してきた
織田杏と言います。
星輝くんにはいつもお世話になってます。
今日は急な事ですいません。」

すると母親はにまーっとして、肩を叩いてくる。
何か笑顔がきもちわるい

「彼女？
凄く良い子ね。」

違うと言ってもきかない母親を無視して部屋への階段をのぼる。
後ろからついてくる杏に母親が声をかける。

「ゆっくりしていってね。」

すると杏はペコッとお辞儀をした。

「お世話になります。」

部屋について何を話したらいいか全くわからなかった。
部屋に女の子をあげたのは、姉貴と雪実だけだから妙に緊張する。

「あっそうだ。
母親にちゃんと連絡しろよ。」

杏は嫌そうな顔をしたが、さすがに納得してくれた。
そこまで心配をかけれない
そう思ったんだろう

「じゃあ電話するね。」

携帯でかけようとする杏に念のためきいてみた。

「下に居ようか？」

きいてすぐは驚いた顔をしたが、後はいつも通りの表情に戻っていた。

「そうしてくれたら助かる。」

「電話が終わったら呼んで。」と告げ
階段を降りていく。

その時部屋から聞こえる少し怒った声
普段の杏からは想像出来なかった。
ダメだと思いながらも扉の前で耳をすませる。

「大丈夫…全部大丈夫だから。
持ってるし1日だよ？
お母さんが望むなら明日の朝学校前に家に戻るから。
今日だけはほっといて。」

それで電話が終わった。
星輝はバレないように一旦下へいき、飲み物が置かれたお盆を片手に上がった。
これでバレる事はないだろう…

「お母さんいいって？」

「うん、東山くんの家に泊まらしてもらうってちゃんと伝えた。」

さっきの電話の内容も気になったがあえて触れず
気になったもう一つの話をする。

「東山くんじゃなくて星輝って呼んでよ。
皆そう読んでるから。
東山くんって慣れないし。」

しばらく考え込んでいるみたいだ。

「でも下の名前で呼ぶと誤解されるよ。」

返ってきたのは意外な言葉だった。
クラス中が呼んでいる名前を呼んだ所で彼氏に思われる事は無いだろう…

「何を誤解するの？」

「私と貴方が友達だって…」

誤解

君はそう言ったんだよね？

友達にはなりたくないのか…

「別に俺は良いけど？」

すると杏は首を横にふる。

そして初めて少し心の中に触れさせてくれた。

「ダメだよ。

いじめも、私の事情も貴方を巻き込めない。」

事情

そこに君が沢山の事にこだわる意味があるハズだ。

今はきかないけど、いずれ俺はそこまで触れたい…

「俺は覚悟できてるし。

それにもう…あ…ん…は俺のダチだろ。」

初めて呼んだ杏という名前の部分の声が情けないぐらい震えた。

「じゃあ…呼ぶけど友達にはならないよ。

星輝。」

初めてだった。

自分の名前がこれほど輝いてきこえた事

心地よくきこえた事は
呼ばれた感動に浸っていると母親が呼んでいる事に気づく。
「せいきーー」
呼ばれて下に行くと母親がニヤニヤ笑っている。
「ごめんねーお邪魔だったかしら？」
ニヤニヤする母親を睨む。
すると母親は本題を話し出す。
「今日の晩御飯何が良いかきいてきてくれる？」
それを先にいえ
そう思ったがあえて言わずに杏の元へ戻る。
「今日の晩御飯何が良いって？」
杏はしばらく悩みこんでいたが
何か思いついたの急に顔をあげる。
学校では気づかないけど杏って意外に表情がコロコロ変わるよなぁ
「何でも良いよ。
あの、もしよかったら手伝わせてもらってもいいかな？
何もせずに泊めてもらうのは悪いし。」
ホントはそんな事しなくて良いよって言いたいけど
ぶっちゃけ杏の料理食べたい。

「きいてくる。」

母親に杏の意見を話すと喜んでくれた。

あぁ良い光景…

母親と杏がキッチンに並んで料理を作っている。

「あら、杏ちゃん手際が良いわね。」

母親は杏の包丁の使い方をみて普段から料理をしている事がすぐにわかった。

じゃがいもの皮を向きながら杏が答える。

「わたし一人っ子なんでお母さんと2人で一緒に料理作ってたんです。」

優しく微笑みながら料理していく、杏をジーっとみていた。

いつまでも見ていたい…

「こら星輝。

気がちるから向こうに行ってなさい。」

怒られた星輝は膨れながらもソファーに座りに行った。

そしてテレビを見ていてもやっぱり杏が気になる。

母親が余計な事を言ってないかも気になる。

「ふふ。

星輝ったら奥さんの料理を待つ旦那さん見たいね。」

何気ない母親の一言に驚いた杏がニンジンを落とす。

「あら、ごめんなさいね。
でもそういうのんびりした家庭は良いわよ。」

杏はニンジンを拾い上げ洗いながら考えていた。
考えもしなかった。
結婚とか…

「はい、幸せですね。
そんな事夢みたいです。
でもきっと……ない。」

最後のひと言だけ急にボリュームがさがり途中の部分を母親は聞き取れなかった。
でも集中して料理を作っているみたいなので尋ねはしなかった。

「さぁ召し上がれ。」

星輝の父親、姉貴、全員勢揃いでご飯が始まる。
友達の家に泊まるのが初めてだった杏は緊張しまくっていた。
しかも今日の肉じゃがを作ったのは私だし…

「杏ちゃんは星輝の彼女なの？」

ズバッと星輝にではなく本人にきいてくる。
相変わらず真っ直ぐな奴だ。

「ちょっ姉貴。

何きいてんだよ！」
横にいる姉貴に向かって睨んでやると怯える事はなく
笑いながされた
「だってお父さんも知りたいと思うよ。」
黙々とご飯を食べていた父親が少し顔をあげ、ニヤリッと笑う。
ホント知りたがりな家族だ。
まぁ俺の知りたがりも父親譲りだしな…
「星輝くんとはクラスメイトですよ。
私つい最近引っ越してきたばっかりなんで。
星輝くん、凄く親切ですよ。」
せめて友達って言ってよ…
嘘でもいいからさ
姉貴が肘をあててくる。
「残念だねぇ。
こんなに可愛いのに見込みないし。
ドンマイ。」
わざわざムカつく
2人が睨みあっていると母親が空気を変えるように言い出す。
「今日の肉じゃがは杏ちゃんが作ってくれたのよ。」
その言葉に父親がピクッと反応する。

そういえばさっきから肉じゃがばっかり食べている。

「料理上手なんだね。
凄く美味しい。」

父親が笑顔で言うと杏は素直に喜ぶ。

「気に入ってもらえてよかったです。」

他愛ない会話を挟みながら夕食は楽しく終わった。

「後で星輝の部屋に布団持っていくわね。」

「ありがとうございます。」

部屋に帰ると杏は笑顔で告げてくれた。

「良い家族だね。
凄く楽しそうで。」
何気ない会話に何気ない返事をしたつもりだった。
けどこれも心の中の１つだった。

「杏の家はどんな雰囲気？」

しばらく会話が止まり杏は考えながらひと言ずつ話し始めた。

「私の家は…みんな優しい
大切にしてくれる
けど過保護すぎる…」

そりゃそうだろ
初対面の俺でもわかるぐらいの過保護っぷりだったし

「そっか
でも優しい親たちなら良いじゃん。」

星輝の言葉を杏は頭の中で繰り返しながらうなずいていた。

「優しいのは良いんだよね。
うん…そうだね…幸せなんだよね。」

まるで私は思ってなかった
そう言いたそうな言い方

「なぁさっき飲んでた薬って何の薬？」

杏は食後すぐに何かの薬を飲んでいた。
何の薬かは全くわからないけど

「ビタミン剤だよ。
この前風邪引いてからお母さんが飲みなさいって言ってて。」

いっそ俺が鈍感だったらよかった。
そしたら何も気づかないのに…
けど人は嘘をつくとき
右上を見るんだ。
そして嘘と表情をつくりだす

「そっか…

たしかに風邪ひいたら心配だよな。」
本能的に察した
まだこれ以上は進んではいけないと
すると丁度いいタイミングで母親が布団を持ってきた。
「はい。
星輝、話するのも良いけど
明日も学校だから早く寝なさいよ。」
またニヤニヤしている母親に素っ気なく言いきってやる。
「わかってるよ。」
この後たいした会話をせずに2人とも布団に入った。
しばらくすると杏の寝息が聴こえてくる。
違う布団とはいえ隣に敷かれた布団は近すぎて
星輝は寝れなかった。
一晩中、星輝は隣に眠る美しい女の子を見つめていた。
美しい…
そして儚い…
壊れるかもしれない
けど触れたい

星輝は手をのばし、杏の額に手をのせた。
そして少し髪をかきあげる。

「…ぅ…ん…」

起きたと思い焦ったが杏は寝返りをうっただけだった。

あっぶねぇ…

俺の行動もあぶねぇ

何してんだ俺

けどこれからも

こうやって幸せな顔をしている

彼女を横で見守れたら

どれだけ幸せだろう…

2、近そうで遠い距離（後書き）

ちょっと進み遅くてごめんね。
よかったらこれからも読んでくださいな（≧∇≦）

3、傷つけると分かっているから（前書き）

何回めかの人は遅くなってごめんね。
はじめましての人は
つたない文でごめんなさい。
どちらの方にも楽しんで読んでもらいたいです。

3、傷つけると分かっているから

「う…ん…ふぁ～」

「あっ起きた？」

学校に行くには少し早いけど、きっと家に戻るためだよね。

「ぅん…いったん家に戻るから早めにね。」

杏は用意をしはじめる。
急に泊まりにきたので特に用意もなくすぐ終わったけど
杏の着替えの為に先に下におりる。

「おはよー星輝。
目の下にクマがあるけど
よく眠れた？」

クマがあるなら答えなくてもわかりそうだけど
朝から殴られるのは勘弁だ。

「寝てねぇよ。
杏は寝てたけど、俺は一睡もできず。」

そう言うと姉貴はわかってたくせに笑いだす。

「そうだよねぇ。
男は割りきれないんだよねぇ。
まぁいいや。

クマの取り方教えてあげるからおいで。」

珍しく優しい姉貴に驚くも
素直に従う事にした。
杏にバレたら恥ずかしいし。

「あっおはようございます。」

素早く着替えをすまして降りてきた杏は星輝がタオルを目の上に置いているのを
ジーッとみつめる。

「あぁ、顔洗ってただけだよ。」

ニヤニヤしている姉貴を放置して杏に話しかけると
素直に納得してくれた。

「杏ちゃんは昨夜よく寝れた?」

またお決まりの質問をしやがって
と、思ったが今更止める事は出来ない。

「はい。
よく眠れました。」

姉貴は質問をしながらも朝ごはんを作っていた。
杏に比べるとだいぶ不器用だけど…

「あれ、何で姉貴が作ってんの?」

姉貴は一瞬だけ星輝をみると、ため息をして作業を再開した。
無視かと思ったが
質問には答えてくれた。

「昨日、あれからお父さんが夜勤に行って
お母さんが帰るのを待ってたから2人とも寝てるの。」

そんな姉貴を見た杏は声をかける。

「私、つくりましょうか？」

客に作らせわしないと思っていたが
姉貴は目を輝かせて杏の手を握った。

「ホント？
ありがとう。
このままだったら朝練遅刻すると思って焦ってたの。」

杏は材料を見てパッパと朝ご飯を作ってくれた。
それは凄く美味しくて…幸せだった。

洗い物をすませて家を出ようとした杏を止める。

「送るから。」

けど杏は首を横にふる。

「ダメだよ。
十分迷惑かけたし。」

そんな杏を無視して星輝は自転車を取ってきて
自転車の後ろをポンポン叩く。
すると嫌がると思っていたが杏はあっさり乗ってくれた。

「ありがとう。」

しばらく走り続け、あと少しで杏の家だと思った
その時

「星輝…ちょっと止めてぇ。」

細い声を出す杏に従い止めて後ろを振り向くと杏の顔色の悪さに気がつく。

「杏顔色わりぃけど大丈夫か？」

道に自転車を止めて杏の手を支えながら川沿いの土手に寝ころぶ。
草の匂いが鼻にかかるけど、落ち着くにはぴったりだろう…

「大丈夫？」

横に居る杏を見ると片手で草をいじっていた。
そして大きく深呼吸をする。

「ここいい場所だね。」

草の匂いを堪能しながら杏は笑顔で告げる。
顔色も少しましになったみたいだ。

「田舎だからな。」

ここら辺は川や田んぼがある田舎だ。
だからクラスも1クラスだけだし。
そして何よりも空気が美味しいらしい。

「転校してきてよかった。
都会よりこっちの方が良いや。」

普通都会からきた人は逆の事をいう。
田舎は嫌だ
不便だって
けど杏は…
都会で何があったんだろう…

「あぁ田舎の良さを教えてやるよ。」

田舎が好きだと思えたなら離れられないぐらい好きになってほしい。
田舎が好きって理由でも良いからずっとこの町に居てほしい。

「うん。
楽しみにしてるね。
星輝、そろそろ大丈夫だから行こ?」

もう一度杏の顔色を見てから星輝は自転車の方へ戻った。
時計を見ると案外時間が経っていない事に気づき安心した。

杏の家に着くと
また母親が勢いよく出てくる。
前みたいに過保護すぎる
でも1つ違うのは母親から感謝されなかった事

杏が家に入り出てくるまで何故か杏の母親と話をする事になった。

「杏は貴方の家に居たの？」

今更ウソをついても無駄だ。
ここははっきり言った方がいい。

「そうです。」

すると母親は怖い顔をして近づいてくる。
怒り
それだけを伝えるために

「どうして？
友達ならどうして止めてくれないの？」

いくら何でもおかしくないか？
過保護なんてすでにこえている。
杏はこんな母親に束縛されて育ったのだろうか？
だったらそれは可哀想すぎる…

「俺は杏が望む事をしたつもりです。
それにどうしてそこまでこだわるんですか？
たった一泊ぐらいで」

ききたくて仕方ない
きいた瞬間母親は何かを言おうとする。
けどギリギリで止めて家の中に戻っていく。

「友達なら今度は止めてください。

それと毎日の送り迎え感謝してます。」
急に態度を変えた母親に不審を抱くも、杏が出てきたので気にしない事にした。

「ごめんね。
お母さんが何か余計な事言わなかった？」

特に容姿に変化は無く出てきた杏。
けど何故か疲れた顔をしている。

「それは別に何も無かったけど。
杏こそ何かあった？」

杏が母親とあったのはおそらく一瞬だけだろう
母親が家に戻り杏が出てくる瞬間だけ
なのにどうしてここまで疲れた顔をしているんだろう？

「私は大丈夫だよ。
行こ！
遅刻したら大変だよ。」

笑顔の裏の真実
星輝にはそれを知る権利は無かった。

学校に着くと時間はギリギリで結果２人で教室まで走る事になった。
何とか間に合ったのは良いけど視線は２人に集まるし
杏の席には落書きだらけのノートがあるし
色々面倒な事になっていた。

「星輝、おはよう。」
星輝が教室に入るといつものように夏葉が1番に話しかけてくる。
あえて杏の事は視界にいれていないみたいだ。

「おっす…
やべぇ酸素が。」

星輝とちがい杏は意外にもタフなようですぐに席に向かった。
杏は席に着くとすぐにノートをパラパラめくる。
そんな杏をみてニヤニヤ女子達は笑っている。
近づき覗くと
穢れた女
と、山ほど書かれている。

いつもなら反論する杏だが今日は何も言わなかった。
ノートを机の中にいれて
窓から外を見ている。

「星輝、そんなに見つめちゃダメだよ。
杏ちゃんと進歩はあった？」

いつの間にか横にいた葵に茶化される。
そんなに見てたかな？

「杏とは別に。
でもちょっとは近づけたと思う。」

何も言ってないハズなのに葵がいきなり抱きついてくる。
そして耳元で囁かれる。

「名前呼ぶ許可もらったんだぁ。
案外進むの早いな。」

「気持ちわりぃ。」

耳に息を吹きかけてくる葵を振り払う。
みんなが2人のやりとりを見て笑っている。
杏も少しだけ笑ってくれた。
くだらない事をするのはあんまり乗り気じゃないけど
笑顔を見れるなら安いもんだ。

授業中杏を通して窓を見ていた。
すると白い物が空から降ってくる。

「おぉ
雪降ってんじゃん。」

思わず立ち上がった星輝を全員が見つめる。
今は運が悪く担任の授業で嫌そうな顔をしながら
咳払いをされた。

「東山。
元気なのは良いが今は授業中だ。
この問題の答えは？」

授業を聞かずに杏ばっかり見てて答えれる訳がない。
立ち上がり焦る星輝の机に横から紙がまわってくる。
焦りながら紙に書かれた文字を声に出して読んでみる。

「2√3？」

「よし座っていい。」

今まわしてきたのは紛れもなく杏だった。
お礼を告げようと横を向くと杏は外を見ていた。

「この雪ってつもるの？」

都会から引越して来た杏からしたら雪も珍しいものの1つみたいだ。

「つもるぜ。
あたり真っ白になるくらいな。」

その時ほんの少しだけど
杏が喜んだ気がした。
そんな杏をさらに喜ばせたくなった星輝は放課後みんなが帰る前に
声をかける。

「今日さ、みんなで雪合戦しねぇか？」

星輝の声にいち早く反応した夏葉は

「する。」

と、答えて喜びだした。
別に夏葉だけを誘ったわけじゃないんだけど
なんてことを考えたが
めんどくさいので言わなかった。

夏葉は次々と女子に声をかけていく。
星輝は葵に
葵は沢山の男子に声をかけ
あっという間にクラスの大半の参加が決定した。

「杏はどうする？」

帰る用意をして今にでも帰ろうとしている杏に
声をかけてみる。
すると杏は振り向き意外なことを言い出した。

「えっ私も参加していいの？」

杏のこんなウキウキした顔を知らない星輝以外のクラスメイトの視
線が杏に集まる。
けど2人はそんなことに気づきもしない。

「当たり前だろ。
それに一緒に帰るんだし。」

二言目は2人だけの秘密だ。

「ホント？
嬉しい。」

杏がクラスメイトの前で笑顔をみせたのは初めてだった。
ぽ～っと杏を見つめる奴もいれば
携帯を取り出して今にも近づこうとしてる奴もいる。
笑顔にしたい。
そうは思ったけど

杏の笑顔は俺だけのものであって
ほしかった。

誰もが見とれる美しい顔をさらしてなんて
ほしくなかった
俺の考えは矛盾だろうか？

雪合戦が始まると女子達が杏を攻撃してくる可能性が高いので
星輝、葵、雪実で
まわりを固めていた。

けど女子達は杏に直接当てることは無い
諦めたのか？

その時

杏をみると

「あぶねぇ！」

星輝は叫びながら杏に近づく。

「きゃっ」

ドサドサドサッ

「杏大丈夫か？」

女子達が狙ってたのはこれだったのか…

杏が隠れていた木にわざと当てて、木につもった雪を落とす。
女子達の作戦は見事大成功で杏は雪まみれになっている。

「いったぁ…」

雪をはらってやると真っ白な雪に目立つ赤がみえる。
よくみると杏の膝から血が出ている。
木の根に引っかけたのか

「大丈夫か？」

別に特に意味もなく手が杏の傷口にむいてしまった。
そして後1センチ

「だめ、触らないで！」

杏にしては珍しい焦った声だった

「わりぃ。」

星輝は傷口に触れる行為を止めて、杏に手を差し出し立たせる。
こけた時に
ぐねったのか
少しひょこひょこしている。
消毒しなきゃならないし
仕方ないか…

杏が嫌がらないうちに
フワッ

と、杏を持ち上げる。

「ちょっやめ…」

案の定腕の中で暴れる杏をあやしながら歩いていると

「大丈夫？」

葵と雪実が声をかけてくる。

「だ、大丈夫。」

腕の中で暴れるのは止めたが
やっぱり気になるみたいだ。

「そっか、よかった。」

まじめに答える雪実と違い
葵はまた余計なことを言ってくる。

「星輝、かっけー。
怪我した女の子をあっさり
お姫様抱っこなんてしちゃってさ。」

うるせーって言ってやろうと思ったが
今も雪が降り続けているので
杏を気づかい少しでも早く保健室に運ぶことにした。
夏葉の表情には気づいていたが杏をほってまで
弁解する気はなかった。

放課後なので保健室に保健医は居なかった。
救急箱を持ち出し手当てをしようとすると
杏にあっさり止められた。

「自分で出来るから。
運んでくれてありがとう。」

嫌がったという訳ではないみたいだけど
断られたのであっさり引くことにした。
黙々と手当てをしてあっという間にバンソウコウを貼り終える。

「血つかなかった？」

やっと話しかけてくれた杏に
喜んで返事をする。

「ついてないよ。」

何でかはわからないけど
杏は今までで1番安心したって感じの表情をした。
別に俺は血恐怖症でもないし
アレルギーでもない（笑）

「血ぐらいついたって流せばいいだろ？」

杏は一瞬悩んだ顔をしたが
すぐに笑顔で微笑んでくれた。
けどいつもの笑顔とは違う気がする。
心の中では違うとでも
思ってそうな表情

「怪我しちゃったし帰るか？」
重い空気を壊す。
「うんそうだね。」
今日ならきっとクラスメイトにも怪しまれることなく
堂々と2人で帰れる。
そう思いウキウキで校庭に戻ると
星輝と杏の荷物を持った
葵と雪実
そして何故か夏葉や女子達まで帰る準備をして
2人を待っていた。
「やっと出てきた。
星輝、ずりぃよ。
そう何回も2人で帰れると思うなよ。」
葵の一言で男子達
が一斉に杏に近づいてくる。
「織田さん大丈夫？
すっげぇ心配した。」
そんな言葉を次々と杏にかけていく。
仲良くなるのは良いけど
男ばっかりは妬けるなぁ…

「ありがとう。
私は大丈夫だよ。」

杏が教室で見せた笑顔をまた見せ男子達は見いられていた…
そんな男子達を無視して杏の手をとる。

「いこ。
いつもどおり2人で帰ろうぜ。」

そんなうまくいくことはなく
男子達がゾロゾロついてくる。
夏葉は星輝をおって、女の子達は夏葉をおってついてくる。

「星輝ずりぃぞ。
みんなで帰るんだよ。」

男子達は案の定邪魔をしてきたが
星輝は気にせずに杏を自転車の後ろにのせる。

「星輝、抜け駆けするなよ。」

男子達の言葉を無視して進み出そうとする星輝と男子達を、杏はキョロキョロ見比べていた。
そんな星輝の前に男子達が並び行く手を阻む。

「だから、抜け駆けすんなって。」

「あぁもう、うっせぇな
杏は怪我してんだぜ？
少しでも早く家に届けた方が良いだろ。」

その言葉にはさすがに言い返せなかった
男子達がとぼとぼと自分の家の方向に散らばっていく。
女子達も同様だった。
そんな2人の元に残ったのは葵と雪実だけだった。

「雪実、どうするぅ？」

わざとらしく葵が雪実に問いかける。
そんな葵と違い雪実の答えは凄く真面目だったけど

「う～ん。
私は心配なんだけど。
歩きだから迷惑かけちゃいそうだし
葵と帰る。」

「じゃあいつもどおり2人で帰りますか。」

その言葉を合図に自転車を走り出す。

「杏ちゃんお大事に。」

後ろからは風にのって2人の叫び声がきこえた。
声は聞こえなくなり
いつものように2人の世界に包まれる。
緩やかで和やかで心地良い

「杏ってどこの高校行くんだ？」

前々から気になっていたことを

勇気を出してきいてみる。
期待はしないけど

「東高校だよ。」

キキーッ

急に自転車を止めたので杏は驚いてるみたいだ。
でも星輝はお構い無しに後ろを向く。

「マジで東高？」

「う、ぅん」

「やべぇ
高校も一緒とかスゲー嬉しい。」

星輝は前を向き自転車をまたこぎだした。
後ろに居てもわかるぐらいの喜びを背負いながら

「東高校に行く子は少ないってきいたんだけど…」

杏の問いは一理ある。
うちの中学の大半は西高校に行く。
東高校は西高校より少し遠いし偏差値が高いから

「そうなんだけど
俺と葵はバスケがしたいからさ。
雪実はマネージャーだけどな。
後は夏葉も一緒だ。」

夏葉
その文字を杏は無視しながら会話を続ける。
「バスケ好きなの？」
「おぅ。
中学3年間バスケ一筋だ。
杏はバスケ好きか？」
杏は少し悩んだみたいだが
すぐに返事をしてくれた。
「好きだよ。
バスケ。」
杏の言葉にまた星輝は喜びを醸し出す。
杏は単純だなぁって思ってた。
でも単純な人の方が良いかもしれない。
「じゃあみんなでバスケしようぜ。
卒業するまでに体育館でも借りてさ。」
ウキウキそんな一言で表せそうな感情
どうして彼はここまで私にしてくれるんだろう？
そんな問いを杏は自分に何度もたずねていた。
キキーッ
「ついたぜ。」

答えのない問題を考えてる間に家に着いてしまった。

「今日もありがとう。」

軽く笑顔を向けただけで照れる。
私がいた場所には居なかった男子
下心だけを考えず私を1番に考えてくれる。

「おぅ気にすんな。
じゃあまた明日な。」

キキーッと音をたてながら彼は来た道を引き返して行った。
方向反対なのにわざわざ毎日送ってくれなくても

星輝は1人自転車に乗りながら考えごとをしていた。
もちろん杏のことで
杏は最近、クラスメイト（野郎ども）とも馴染んできてる。
けど俺も含めて
必ず一線を引かれてる。
親しくはする
けど一線は越えない
未だに友達と認められてないし
ただのクラスメイトって地位は嫌だな

そんなことを家についてもずっと考えていた。

♪～♪～♪

携帯からメールの着信音がなる

「誰だぁ？」

寝転がっていたベッドから起き上がり携帯を手にする。
メールを開いた瞬間
背筋がピンとのび
いつの間にかベッドの上で正座をしていた。

初めてだ…
やべぇめっちゃ嬉しい

そう思いメールを開くと

～明日用事があって学校に遅刻するので
先に行ってください。
杏　～

ちぇっ
連絡かよ
まっメールってそんなもんか
でもこのままだと明日は一緒に行けない
けど遅刻はさすがに…

～何だったら途中で学校抜けて迎えに行こうか？～

割と真面目に考えた答えだった
一緒に行きたくて仕方なかったし

メールはすぐに返ってきて

また着信音がなる
けど待ちきれず着信音がなった瞬間携帯を開けた

～そこまでしてもらったら悪いし
それに大丈夫だから
じゃあまた明日～

完璧な流し方
これ以上言わせないって感じがする。

にしても用事って何だろうな…。
用事って言い方だからきかない方が良いよな

翌日
杏を迎えにいく時間に出てしまったため
学校には凄く早くついた。
そのため屋上で仮眠をとることにした

今日は快晴だから
冬でもなんとか寝れそうだ
ちょっと寒いけどまぁ大丈夫だろ

あっという間に眠りの世界に落ちていった

タンタンタンッ

誰だ？
階段をのぼっているのは
夢？それとも現実？

カチャッ
ドアが開く音がする
「星輝見っけ。」
その声にやっと現実に引き戻された。
杏より高い明るい声
まだ空を見ながら女の子に告げる。
「夏葉、何のようだ？」
そう言うと夏葉は手に持っていた膝掛けを俺にかけてくる。
「こんな所で寝てたら風邪引いちゃうよ。」
膝掛けは、いつの間にか冷えていた身体に心地よい温もりを与えてくれた。
親切は嬉しいがそろそろ教室に戻る時間だ。
そう思い膝掛けをたたんで立ち上がると
ポスッ
身体にさらなる温もりが与えられる。
不意打ち
避けるすきが無かった
「おい夏葉、離れろよ。」
傷つけないように口調をやさしめに言ってみた。
けど夏葉はくっついたまま離れない。

「おい！」

少し強めに言うとやっと俺の胸から顔をあげる。
完璧なほどの上目遣い
涙が零れそうなうるうる加減

「好きなの。
わかってたよね？」

夏葉が俺を好きなことなんて皆が知ってる。
けど俺は…。

「夏葉はすっげぇいい女だと思うよ。
けどな俺は好きな人が居るんだ。
わりぃ。」

少し強引に、でも優しく夏葉を身体から離す。
夏葉は下を向いている。
雪も降っていないのに夏葉の足元に雫がおち、地面を濡らす。

「何で？
私の方が星輝を知ってるのに。
私の方が…。
私のこと嫌い？」

「嫌いじゃないけど…。」

好きでもない
そう言おうとしたけど星輝に女子を泣かす勇気は無かった。

「そっか。
じゃあまだ私にもチャンスはあるよね。
私、負けないから。」

そう言って夏葉は階段を降りていった。
一人残された屋上は初め以上に寒かった。
すると丁度予鈴が鳴った。

3限目から遅れてきた杏
別に星輝と杏はただのクラスメイトだ。
けど星輝は夏葉に抱きしめられてしまったことを
ひきずりこの日は杏を見ることが出来なかった。

帰りもただおくっただけで会話はなし。
ホントは遅刻の理由
ききたかったのに
会話のない時間は凄く長く感じた。
いつまでもいつまでも続きそうな長さ
でもひたすら耐えることしか出来なかった。

家帰るとずっと部屋にこもっていた。
あーもぅ何がしたいかわかんねぇ

ギュー

「ぎゃーてめえ何してんだ！」

「うるさいなぁ
星輝は俺が認めた男なのに女みたいな声あげんなよ。」

そんなこと言われても全く気づかなかった。
階段をのぼる音もドアをあける音も全く聞こえなかった。

「葵、とにかく離れろよ。」

そういうと元々ふざけてただけみたいで
すぐ離れてくれた。
でもハグされて思い出したくないことが頭に戻ってくる。

「ぅん、どうかしたか？」

また自分の世界に入りかけた星輝に葵が話しかけてくる。
でもそんなの聞こえない
俺は夏葉とハグしたんだ…
手に触れたんだ…

そのことに気がとられ葵のことはすぐに頭から出ていった。
けど…

「ぎゃー何しようとしてんだ。」

近づいてきた葵を勢いよくぶっ飛ばす。

「いってぇ。
星輝がハグしても返ってこないから
キスで呼び戻そうとしただけじゃん。」

さらりと告げられて違和感が無いように感じるが
俺も葵も男だ

野郎にキスされてたまるか
まぁおかげで現実に戻れたけど

「まぁそれは置いといて
何か用があったのか？」

そう言うと葵は首を横に降りながら漫画を漁り出す。
人のベッドで人の漫画読みやがって図々しいやつ。

「なぁ星輝、何かあったのか？
朝、夏葉と教室に入ってきてからおかしいぜ。」

ちょっとずらしたつもりだったけど
校門から近い階段とは別方向から降りてきたから
バレてたか…。

「何もねぇよ。」

素っ気なく冷静を装って返してやった。
でも葵は賢い
こんな嘘簡単に見破られるに違いない。
まして真横にいるやつに嘘つけるほど
ポーカーフェイスじゃないし

「俺がわざわざ来てやってんのに…」

はっ今こいつ何て言った？
漫画を読みながら葵は向こう側を向いてしまった。

「おまえまさか…

そのためだけに来たのか？」
率直にきくと葵はいきなり漫画を放置してドアの方へ向かう。
「お邪魔しました！」
今にも出ていきそうな葵をひき止める。
「相談乗ってくれるか？」
葵は何も言わずにまたベッドに行き漫画を読み出した。
夏葉のことを全て包み隠さず話す。
葵は途中で口を挟むことなく全てをきいてくれた。
まだ助言も何も言われて無いけど話しただけで一気に軽くなった気がする。
「俺さ今の断りかたでよかったのかな？」
すると葵はやっと漫画を置いて真っ正面を向いて向き合ってくる。
「男はさ本気で好きじゃない女には嫌いって言ってあげなきゃならない時もあるんだよ。
それが相手のためだ。
ちゃんと言え！」
さすが女に告られまくってるだけあって扱いになれてるらしい
嫌いか…
「ちょっと考えるわ。」

この日葵が帰ってからも星輝は夏葉と杏のことを考えてた。
どうするのが1番良いのか一晩中考えてた…

4、傷つけるということ

星輝は翌日杏を迎えに行くのを断り
杏が学校に来る前に夏葉を呼び出した。
昨日告白された屋上で全てを終わらす。

「おはよ。星輝
用ってなぁに？」

相変わらず笑顔の夏葉
ホントは誰も傷つけたくない
けど俺は…。

「朝からわりぃな。
ちゃんと言っとこうと思って
昨日チャンスはあるって夏葉言っただろ
でも無いから。」

全てを告げたとき吹いた風はいつもの何倍も冷たく感じた。
誰かの悲しみをのせてるように寒い

「私のことそんなに嫌いなの？」

今にも泣き出しそうな目を向けられる。
違うって言ってあげたくなるか弱い女のコの目だ

「嫌いじゃないけど、夏葉を恋愛対象にみることは絶対ない。」

これが星輝の出した答えだった。

さすがに星輝に嫌いとは言えない。
だったら俺は俺なりの答えで言いと思う
フラれて女は強くなるべきだしな
まぁ理想にすぎないけど

「私絶対織田さんより星輝のこと見てる自信あるよ！」

きっと杏にとって俺は1人のクラスメイトにすぎない。
でも俺はきっと夏葉を愛せない

「もしな、お前の言葉に甘えて俺とお前が付き合っても
俺はお前を愛せない
お前の行動をとおして杏を思い出す」

ホントはここまで言いたくなかった。
でも俺にとって夏葉は大事なダチだから
新しい恋してほしいから。
夏葉の目から涙がこぼれる。
止まらない涙
夏葉を見ながら星輝は優しさをこらえた。
今もし優しさを向ければ夏葉が傷つくことを知っていたから

「何で？何で？」

狂ったようにきいてくる。
でもその問いには答えなかった。
まだ自分にもわからなかったから
涙を流し続ける夏葉をおき1人屋上を後にしようとした星輝

「好きでいるのも迷惑？

高校も同じなのに忘れるなんて出来ないよ。」

激しい恋心
星輝は夏葉の心の深さを知った。
夏葉は今までに何度も俺を思って涙を流してくれてたのかな？
そう思うと少し愛しさをおぼえる
これは愛に繋がるのか？
恋愛対象として見れてるのか？
わからない

「迷惑とは言わないさ。
でもな叶わない恋をし続けるのは辛い
俺は夏葉に俺を思って泣いてほしくない。」

優しく言ったつもりだった
けど夏葉はますます涙を流した。

「そんなこと言うんだったら…。」

涙を流していて悲しそうなのに
どこか怒りが見える。
キッと睨まれてる気さえする。

「えっとどうかしたか？」

パンッ

一瞬何が起きたかわからなかった。
涙を流しながら自分の右手を左手で夏葉は握りしめていた。
ヒリヒリする左頬

そっか叩かれたんだ

「フルなら優しいこと言わないでよ。
嫌いだって言ってよ！
大嫌いだって…。」

いつもの強気な顔とは違いポーカーフェイスは崩れてる。
バレない程度のナチュラルメイクは存在を主張するようにボロボロけど今までみた夏葉の中で1番綺麗だと思う

「俺、嫌いじゃない人に嫌いとか言えないし。」

正直に言ったのに夏葉は全く救われた顔をしてくれ無かった。
さっきと同じ悲しみと怒りの顔

「そういう所大嫌い！」

そして夏葉は去っていった…。
夏葉が去るとき俺は空を見ていた。
夏葉の降りていく足音だけが聞こえると思ってたのに

パンッ

さっき俺が叩かれたときと同じ音がする。
そして屋上のドアが開かれた。

「葵か？」

夏葉が叩ける人で俺が親しい人といえば葵だろう

「あぁ…。」

予想はやっぱり当たってた。
気まずそうに隣にやって来た葵
初めからきいてたんだろう
偶然じゃなくてわざと
きっと俺を心配してくれてるからだと思うから怒りはしない。

「その頬どうしたんだ？」

叩かれたのはわかるが何故かはわからない
夏葉は普段は叩かないし
葵が何か言ったことぐらいわかる

「誰かのせいで珍しく泣いてたからさ
肩に手を沿えて耳元で囁いたら叩かれた。」

落ちそうなシチュエーションを簡単に言う葵
まぁいつものことだが
でも囁いた言葉に怒ったんじゃないのか？

「何て言ったんだ？」

葵がニヤニヤ笑いながら答える。
何かちょっとそのエロいことな気がする。

「俺が心も身体も温めてやるよって言っただけだけど」

普通だろと言いたそうな葵を無視する。
大人みたいなことさらっと言いやがって

むかつくやつ
普通免疫無かったら叩くだろ。
「そんなに慣れてていいな。
女の扱いに悩まなさそうだしな。」
そう言うとまるでわかってたように
腕を肩にまわしてくる。
「たしかにちょっと断り方は傷つけてた。
でもな夏葉はそんな星輝が好きだったんだよ。
それにな俺だってどうにもならない女もいる。」
傷ついたのは夏葉なのに
俺の心をも傷つけてた
葵の優しさが心の傷にしみていく。
じんわり暖かさが広がる
嬉しいけど有難いけど
「野郎に慰められても嬉しかねぇよ。」
腕をふりはらって屋上を出ようとする。
すると
「心だけじゃなくて身体も慰めてやろうか？」
笑いながらきいてくる。
意地悪なやつだな
くだらないことききやがって

「じゃあ慰めてくれよ。」

これにはさすがに驚いたのか葵が固まっている。
予想外でしたって顔に書いてるし（笑）

「お、おれさ男はちょっと…。」

珍しくうろたえる葵に心の傷なんて忘れて笑い転げる。

「ばっかじゃねぇの。
たまには俺とデートしようぜって意味」

意味をきくと葵は相当驚いていたのか
屋上に座り込む。
そんな葵の横に星輝も座りこんだ。
そして葵の肩に手をまわした。
さっき葵がしてくれたように肩を組む。
ありがとうの意味を込めて

この日授業中や休み時間杏を見つめる時に夏葉を見てみた。
強気だけど今日は弱い気がする
でも今日の夏葉がたぶん1番好きだ。
恋愛的な意味じゃないけど、人として

放課後になり杏をいつも通り自転車に乗せる。
葵と遊ぶのは杏を送ってからだ。
昨日と違いナチュラルに接することが出来てる気がする。

「星輝はさ、何で何もきかないの？」

いきなりきかれた質問の意味があんまりわからなかった。
ただわかったのは杏の様子が違うこと
後ろに乗っているのは学校に来たばかりの孤独な杏だった。

「どういう意味だ？」

そういうと杏は少し迷いだす。
きいてきたのは杏なのに

「私のこと知りたいって思わないの？」

びっくりした
言われた瞬間急ブレーキをかけそうだった。
もしかして杏は全て気づいてるのか？
俺の気持ちに

「知りたいよ。
でも杏が話したいと思った時でいい。」

すると杏は安心したように星輝の腰あたりにギュッと抱きついてきた。
嬉しいけど
縮まらない距離がある気がして寂しい。

「じゃあまた明日な。
明日はちゃんと迎えにくるから。」

「うんありがとぉ。
また明日。」

星輝はきた道を戻りだした。
俺にとっていつの間にか学校から杏の家までの道も
通学路になっていた。

家につくとすでに葵がベッドの上で漫画を読んでいた。
勢いよくドアをあけ葵から漫画を奪い取る。

「何だよ。
漫画ぐらいいいだろ！」

まぁ細かいことで怒る気はないが
くつろぎすぎだろ。
床にブレザーを脱ぎ捨て
制服のシワを気にせずベッドの上でゴロゴロして
ここは葵の家じゃないし
今に始まった行為では無いんだけど…。

「なぁ葵。
今日泊まっていかないか？」

ホントはそんなつもりじゃなかったけど
杏のことを話せるほどの親友は葵ぐらいだ。

「良いけど。
杏ちゃんと何かあったか？」

相変わらず女関係の話は強いな。

星輝は葵に帰りの話をした。

私のこと知りたくないのか？ってきかれたこと。
ギュッとされたこと
全て

「なるほど。
もっとめんどくさいのかと思ってたけど
案外普通だな。」

人が杏にバレてるのか焦ってたのに
簡単に流しやがって
そう思ったけど相談を持ちかけたのは自分だから我慢することにした。

「それはたぶんあれだな。
気持ちに気付いたんじゃなくて
重ねてるんだ。」

「重ねてる？」

「あぁ」

そう言うと葵はまた漫画を手にとり
寝転びながら話し始める。

「あれだけ美人だから前の学校でもモテたんだろ。
で、沢山の男子が杏ちゃんに質問をしまくった。
で、星輝も男子だからひとまとめにされたってわけだ。」

葵の簡単すぎるまとめ方を頭の中で何度も繰り返してみた。
前の学校の男子
俺も男子＝…！

「そういうことか！
俺も前の学校の男子みたいに質問攻めにすると思ってただけか。」

答えを導くと葵はため息をはいた。

「だから今そう言っただろ。」

「お前の説明わかりにくいからさ。」

この夜、杏のこと、バスケのこと、高校のことを話し合った。

「お前ってさぶっちゃけ杏ちゃんとどうなりたいの？」

もぅ日付が変わり、外は暗い。
この時間にやっと目的を葵は話し始めた。
ベッドに寝転び天井を見上げた。
居ないけど杏の笑顔が浮かぶ。

「俺は…杏に笑顔でいてほしい。
今もこれからもずっと。」

俺の願いはこれだけだ。
たまに見せる悩んだ顔は嫌いだ。
心からの笑顔を常に見ていたい。

「そっか。
彼氏になりたいわけじゃないんだな。」
「なっ何でそんなこと言うんだよ。
別に俺は…。
お前はどうなんだよ！」

いつも杏を見るたびに褒め称える葵
前から思ってた。
葵は本気で杏に惚れてるんじゃないって
悔しいけど葵は手強い男だし
俺が認める男だからな。

「俺は何とも思ってないよ。
美人は一晩で十分だ。」

焦ってる星輝とか違い葵は悩まずあっさり答えた。
嘘をついてるようには見えない。

「一晩って…。
お前好きな女いないのか？」

長い間葵といるが、葵の好きな人の話なんて聞いたことがない。
常に女とは一線がある感じで
唯一自然なのは雪実の前だけだ。

「俺は…。
どうだろうな」

話すように見えたが葵は笑顔で誤魔化した。

何か俺にも話せないことがあるみたいで
何だか遠くに感じた。

「好きな人と言えば雪実の話も聞かないよな。」

話題を変えることにした。
このままだと気まずくなる気がしたし
でも雪実って言った瞬間
葵の眉が少し上がった気がした。
まぁ気のせいだろうけど

「そうだな。
あいつが誰かを見てることないな。
ふぁ〜〜。
ねみぃ。俺そろそろ寝るわ」

さっきまで普通に話してたくせにいきなりアクビをしだす。
今話し終わらしたか？

「お、おぅ。
夜更かしさせて悪かったな。
じゃあおやすみ。」

葵は雪実をどう思ってるんだろう
いつか話してくれると良いな
俺らはダチだし

俺と杏の関係か…。
高校まで一緒にいれる。
けどずっとこの距離は…切ない

遠ざかることはあっても近づくことは出来ない
好きって言えば何かが変わるのだろうか？
俺にはそうとは思えない
伝えたら関係は壊れる気がする

伝えたとき俺が全ての男子と同じになるときだろう
今日みた孤独な杏は見たくない
だったら少し切なくても
このままでいるべきなのか
誰かこの答えを教えてくれ…。

5、知らない過去がある（前書き）

タイトルとか色々変更しました

5、知らない過去がある

「おはよ！」

「おはよう星輝。」

今は杏の家の前に居る。
今朝葵とは俺の家の前で別れて1人杏を迎えに来た。
葵も誘ったが葵はいつも雪実と行ってるから断られた。
まぁ良いんだけど
2人っきりでもさ

いつも通り自転車の後ろに杏を乗せる。

「あっそうそう今日さ放課後葵と雪実と一緒に近くの公園に
バスケしにいくんだけど
杏もどう？」

部活が引退したからといってサボると身体がなまる。
だからゴールがある公園によくバスケをしにいく。

「う～んどうしよっかなぁ」

悩んでる杏に無理強いする気はない
けど正直来てほしい
バスケしてる所を見てほしい

「体育館じゃなくて悪いけど
公園にもバスケのコートがあってさ。

雪実の話し相手がてらにでも来てくれないか？」
俺はセコい人間だな。
ホントは雪実じゃなくて俺のためなのに。
こんなだから友達以下なのかな

「そういうことなら。
歩いて行ける距離？」

「雪実は葵が
杏は俺が自転車に乗せてくよ。」

「わかった。
楽しみにしてるね。」

辺りはいつの間にか学校の生徒がちらほら歩いていて
同じ学年の人は2人を見ている。
ヤバッ
俺ら2人共意外に有名人だからな

「そろそろ降りるね。
毎日ありがと。」

杏も同じことを察したのかすぐに自転車を降りた。
自転車を降りるとすぐに1人の人影が近づいてくる。
タイミング良いのか悪いのか

「星輝おっはよー。
織田さんもおはよっ。
教室まで一緒しよっ！」

夏葉はわざとらしく俺と杏の間に入ってくる。
杏は全く気にしてないみたいだけど。
2人の時間があっさり壊された。

「おっす…。」

暗めに返しても全く気にせず笑顔を返してくる。
そんなビミョーに気まずい空気の中に明るい空気が混ざりあう。

「みんな、おはよっ。
杏ちゃん今日も可愛いね。」

いきなりナンパみたいな行動を取る葵の頭を雪実が叩く。

「いてっ」

「朝から何言ってるの！」

仲良く視線を気にせず2人乗りをしている。
叩かれたのに葵はどこか楽しそうだ。
夏葉はあれ以来葵を露骨に嫌がっていた。
話しかけないし
葵がいると離れていく。
今朝も葵が来ると教室まで走っていった。

「あれ～
俺最近夏葉に避けられてるかも。」

まるで理由がわからないみたいな言い方をするけど

絶対わかってるだろ。
雪実はそんな葵を無視して自転車から降りる。
「杏ちゃんおはよう。
星輝から放課後のこと話きいてるよね？」
「ぅん行くよ。
私でよければ話し相手になるよ。」
ぱーっと顔を明るくする雪実に杏もつられて笑顔になる。
「やっぱ女のコの笑顔は良いねぇ。」
また杏を見ている葵のネクタイを引っ張る。
「さっさと行くぞ。」
毎日繰り返される時間
杏が来てから何気ない時間の楽しさを実感させられた。
～昼休み～
少し暖かいから4人でお弁当を持って屋上に行こうとすると夏葉に
声をかけられる。
「バスケの参考書持ってない？」
杏達には先に行ってもらった。
いきなり言い出す夏葉の言葉に首を傾げていると
具体的に話してくれた。

「高校に行ったらバスケ部のマネージャーになりたいの。
だから今から勉強したい。」

誰のためにとか
目的はあえてきかない。
葵もいるバスケ部に入ろうとしている夏葉の一途さは申し訳ない気がする。
でも片思いは個人の自由だ。

「わかった。
明日持ってくるわ。」

「うんありがとぉ。」

ルンルン
そんな感じで夏葉は女子達の輪に戻っていった。

屋上に入ると葵が杏と雪実に挟まれて楽しそうな顔をしている。
まるで邪魔者が来たような視線さえ向けてきた。
でもあえて気にせず堂々と杏と葵の間に入ってやった。
何か言ってくるかと思ったけど葵は夏葉との話に興味津々だ。

「なぁ何て言ってたんだ？」

「ちょっと葵
プライバシーだよ。」

思いやりにかけてる葵を雪実が止める。
けど気にせず話した。
別に隠す必要のあることは1つもない。

それに試したかった。
夏葉の話をした時の杏の表情を

全て話し終えて杏をみる。
杏は俺の視線に気づいてくれた。
でも言われたのは意外な言葉だった。

「嫌がらせとかするから性格悪いのかなって思ってたけど
本当は一途で可愛い女のコなんだね。」

まるで応援したい
そんな言い方をされる。
杏の一言は溶けることのない
氷柱のように俺の胸に突き刺さった。
葵の同情の眼差しも
今の俺には胸を突き刺す道具でしか無かった。

放課後まで頭の中は昼休みの会話がフラッシュバックされるばかり。
授業なんて頭には入らない。
けど放課後の練習のために無理矢理頭の中をリセットすることにした。

放課後
それぞれ自転車に乗せて走り出す。
いくらマフラーをしていても
２月末の気温は頬を冷たくさせる。
ただ杏の腕がまわされた場所だけが
真夏みたいに暑かった。

公園は自転車で１０分くらい走ればすぐつく。

ここら辺では珍しくコートみたいにゴールが2つある大きめの公園だ。
学校が終わりすぐに来たので
幸い誰も練習をしていなかった。

「よしっ久しぶりにやるか。」

軽くウォーミングアップするとボールをドリブルする。
独特のドの音がリズムよく流れるのが心地良い。
それは杏も同じだった。

「雪実ちゃんはいつも練習に付き合ってるの？」

マネージャーとかしたこともない杏からすると1人はヒマだと思えて仕方なかった。

「うん。
2人がバスケしてるの見るの好きなんだ。
凄くかっこいい」

確かに私もそう思う。
いつも笑顔の2人も良いけど
真剣にバスケをしている2人は妙に男らしい。
綺麗な曲線を描き入るシュートは見ている人を惹き付ける。

「雪実ちゃんも大変だよね。
葵くんモテるし。」

2人を真剣にみてマネージャーらしくメモをしていた雪実が
杏の一言に驚きメモを落としそうになっている。

「えっと…別に大変なこととか無いよ。
幼馴染みって皆に説明するまでは、確かにいじめられたりするけど。
」

あくまで2人について話し出す雪実に杏はさらに言いたいことを具体的に話す。

「そうじゃなくて好きでしょ？
葵くんのこと。」

バサバサバサッ

雪実は手に持っていた物を全て地面に落としてしまう。
幸い2人はバスケに夢中で気がついてないみたいだけど。
雪実が落としたファイルなどを一緒にしゃがんで拾っていく。
雪実の字で細かくかかれた1人1人のデータ
特に葵の分は凄く細かく分析されている。

「いつから知ってたの？」

霜焼けか照れかはわからないけど
雪実の顔は真っ赤だった。
真面目な彼女の女のコらしい一面は凄く魅力的だと思う。
きっと葵くんも、そう思ってるハズ

「う～ん出会ってすぐかな。
葵くんの雪実ちゃんへの態度は特別だもん。」

全く気づいてなかったみたいで凄く驚いている。

「私可愛いって言われたことないよ？」

今まで不安だったんだろう
小さな声でつぶやく。
ふんわりとした和やかな雰囲気
他の女のコと違う癒しの空間を彼女はつくってくれる。

「きっと簡単に可愛いって言えない相手なんだよ。」

ガールズトークでつくられた和やかな雰囲気がいきなり崩された。
勢いよくコートを囲むフェンスが揺れた。

ガシャガシャッ

「俺らが使うんだよ。
どいてもらおうか！」

いきなりケンカでもしそうな雰囲気に怯えて雪実を見ると
大丈夫だよって笑顔を向けてくれた。

星輝と葵は慣れてるみたいで
ボールを片手に相手に近づいていく。

「じゃあルールに従ってやりますか。」

「ルールって？」

はじめて来た場所のルールなんて杏にはわからない。
すると雪実が説明してくれた。

「ここら辺でコートつきの公園はここだけだから
よく練習に来る人がいるんだ。
で、もめないように
バスケで勝負して勝った方がコートを使えるルールなの。」

スポーツマンらしくねと雪実は付け足した。
確かに相手も従ってコートに入っていく。
問題なさそうに見えたが
意外な所に問題があった。

「じゃあ３ｏｎ３しようぜ。」

相手が言い出したのは
３対３の勝負だった。

「は？
俺ら２人しかいないし。
そんなの不公平だろ。」

星輝と葵は反抗するが相手は聞く耳を持たない。

「やらないなら不戦勝で良いかな？」

ニヤニヤとセコい顔をして笑っている３人組
チッと舌打ちをする２人

「仕方ねぇ２人でやるか…。」

そうは言っても３人とも２人と同じくらいの背で簡単な話ではない。

雪実は隣で手を震えさしていた。
怒りか怯えか
わからなかったが本人がすぐに答えをくれた。
「私が入るよ！
下手だけど出来ないことはないし…。」

マネージャーはしているが雪実は運動は得意ではない。
そんな雪実が入っても邪魔なのは本人が1番わかってるハズなのに
言い出したのは悔しくて堪らなかったからだろう
そんな重い役を雪実に背負わせる訳にはいかない。

「雪実ちゃん。
私が入るから
そこで見てて。」

杏は髪の毛をポニーテールにくくりコートに入ってくる。
不安そうな男子達からボールを奪い取りウォーミングアップを始める。
スリーポイントに位置に立ち腕を使いボールを投げる。
みんなが杏に注目していた。
敵の力の判断と
杏のバスケの実力を知るため
誰もが想像をしない展開だった。

パスッ

「えっ」

星輝は思わず声をあげてしまった。
普通初心者にスリーポイントなんて決めれるハズがない。

「うん、なまってないな。」

驚いているのは星輝だけでは無かった。
葵も敵も驚いていた。
色んな角度からドリブルをつけシュートをきめていく杏。
驚くのは1度も外していないことだった。

「杏ちゃんバスケしてたの？」

葵がきくと杏は恥ずかしそうに答える。

「これでも前の学校ではエースだったんだよ。
最近はボールに触れてなかったけど。」

こうして俺らは意外な味方をつけ試合に挑んだ。
数える必要もないぐらいシュートは決まっていく。
ダブルスコアになるまで時間はそうかからなかった。

デフェンスの間をくぐりぬけてパスをする。
そのパスは次々に仲間に渡り
ゴールへと運ばれる。
純粋に凄く楽しかった。
ドリブルの音、ゴールの音、葵と杏の掛け声、雪実の応援
全てが1つになって心地良い音楽にきこえた。

「覚えてろよ！」

なんてベタな負け犬台詞を残して3人は去っていった。

「プッ
何あの一言。
弱いやつら。」

4人で爆笑しだす。
こんなに笑顔の杏ははじめてみた。
バスケをし続けて顔を赤らめているけど
凄く綺麗だ。

「杏ちゃんスゴいね。」

雪実はうらやましそうな視線を向ける。

「高校ではバスケするの？」

葵はただ興味津々って感じだ。
でもそれは俺も知りたいから
きいてくれた葵に少し感謝する。

「入らないよ。
でもマネージャーになってみたいかも。
今日雪実ちゃんをみて
するより支えるのも良いかなって」

雪実はおもわず杏にハグをしていた。
女だったら簡単に抱きしめれたのにな
なんてバカなことを考えてしまう

「杏はそれで良いのか？
バスケしなくてさ。」

マネージャーになってくれるのは嬉しいけど
杏の希望が１番優先だ。

「うん。
元々こっちに来た段階でバスケは辞めるつもりだったんだ。
でも意外な所でバスケと繋がっちゃった。」

前に杏にバスケは好きかときいた時少しの間があった。
きっと過去に何かがあったんだと思う。
忘れられない重い出来事が

俺らに出会う前の杏を知りたい
彼女の心にある傷を癒したい
そう思うのは贅沢だろうか？
バスケは俺にとって１番好きなスポーツだし
それは杏も同じだと思う
だからこそ良いイメージだけを持ってほしい
それは全てきっと杏の笑顔に繋がる道だと思うから…

5、知らない過去がある（後書き）

あと1話で中学生編完結です。
そのまま高校生編につながります（＾Ｏ＾）

6、終わりは始まり（前書き）

更新かなり遅かったですね…。
これからは早めに頑張ります

6、終わりは始まり

月日はあっという間にすぎ
杏が来てから1ヶ月が経過し
卒業式は1ヶ月後に控えている。

相変わらず杏と話をするのは
俺と雪実と葵と時々夏葉
そして他の男子だけだ
他の女子は全くといって良いほど話しかけようとはしない。
嫌がらせは完璧には消えてない。
でもクラス全体が仲良くなれてる気がする。
本人は自覚ないだろうけど杏のおかげで

「夏葉！
わりぃ待ったか？」

今は学校に来てすぐだった。
朝早くから夏葉からメールが来て
学校に着いたらすぐに屋上に参考書を持ってきてほしい
というメールだった。

「ううん全然良いよ。
こっちこそ朝からごめんね。」

気まずさは消え普通に他愛ない会話をして参考書を手渡す。
朝からといっても
いつもと同じ時間だから

そこまで時間に余裕はない。
参考書を手渡すと星輝は屋上を去ろうとした。

「ま、待って！」

去っていこうとした星輝の腕がふいに掴まれる。
両手でしっかり掴まれてる。
けれど下を向いていて男の力なら簡単に外せそうだった。

「ぅん？
どうかしたか？」

頭の中でまとまるまで夏葉の言葉を待つ。
何か用があったなら
ちゃんときくべきだろう
たとえそれがめんどくさいことでも
宣戦布告でも

「あのね、ずっと言わなきゃいけないって思ってたんだけど…。」

「あぁ。
落ち着けよ。
待つからさ。」

逃げないことがわかると夏葉は腕を離してくれた。
深呼吸して自分を落ち着かせてる。
告白は前にきいたし
何かまだあったかな？

「ずっと前から謝りたかったの。

佐々木のことと
織田さんのこと。」

「佐々木と杏がどうかしたか？」

佐々木と杏のことと言われればだいたいはわかってた。
でも夏葉は前に1度否定したから
あえてわからないフリをしておく。

「わかってたよね？
イジメのこと…。
みんなにいじめてって頼んだ訳じゃないよ。
でも煽ったのは私だから…。
ホントにごめんなさい。」

やっぱり夏葉だったか…。
わかってた
けど何故か否定したかった
たぶん夏葉のことを信じてたから

「それは本人に直接謝れよ。
俺は何もされてないんだし。」

進んだ月日は無駄にはならない
それぞれ考えて過ごす時間だ
きっと夏葉も沢山悩んでたハズ
確かに許されないとは思う
けど正直に言ってくれたし俺は夏葉を責めない

「ちゃんと織田さんに謝るよ。
こんなの間違ってるかもしれないけど
私は星輝にとって誇れる友人でありたいの。」

「夏葉…。」

一言で言えば下心かもしれない
けど俺はスゴく嬉しい
それにな夏葉
俺にとってお前はすでに誇れる友人だぜ。

「話はそれだけ。」

去っていこうとした夏葉を追いかける。
そして前にたつと軽く頭を叩いてやる。

ポンポンッ

「えっ」

「ありがとな。」

そう言って俺は夏葉の前を去った。
ホントは少しでも冷たくして嫌われた方が夏葉のためだと思ってた。
けど夏葉が絶対に諦めないと言うなら
これからも俺はありのままでいる。
もちろん友人として。

別れてからすぐに教室に戻ったが

夏葉は戻って来なかった。
鞄はあったから学校内にはいるんだろう
でもわざわざ探したりはしない
きっと今は1人になりたいと思うから

1限目が終わり2限目が始まる。

「…！！」

ふと杏の席をみると杏がいない
夏葉もまだ戻って来てない。

「おい星輝、杏ちゃんが…。」

同じことに気づいた葵が心配そうな視線を向けてくる。
雪実も同じだった

「大丈夫だ。
たぶん夏葉と一緒にいるんだろ…。」

「だからこそ心配を」

星輝が大丈夫と言っても心配そうな視線を止めない葵と雪。
ホントは2人だけで話し合って欲しかったけど
葵と雪実に押されて探しにいくことにした
たぶん屋上ってわかってたけどバレないように誤魔化す

その頃屋上では星輝の予想通り杏と夏葉が話し合っていた。

「今までホントにごめんなさい。」

わざわざ授業中に呼ばれた杏
一緒にサボる必要は無かったけど
杏も夏葉と話がしたかった。

「別にいいよ。
たいして気にしてなかったし」

しいていうならうざかっただけだし
傷つくことは何も無かった

「そぅ…。
じゃあここからは別の話
私は星輝が好きなの。
貴方に譲るつもりはないから。」

たぶんこっちが1番話したかったことだろう。
転校してきてすぐに気がついてはいた。
だからあんまり星輝に近づきたく無かった
けど彼は今の私にとって特別な人となってしまった。

「簡単に好きっていえる貴方が羨ましいと思う反面憎い。」

急に出てきた杏の孤独な気持ちに夏葉は驚きを隠せなかった。

「何よ。
好きなら好きって言えば良いじゃない。」

そうとしか言えなかった。

羨ましいと言われたのは気にならないけど
憎いと言われたのは夏葉にとって初めてだったから。
杏もホントはここまで言うつもりは無かった。
でもとっさに言葉が出てしまった。

「私は星輝を引き止めるつもりはないよ。
星輝の意志しだいだって思う。」

この時杏は気づいてなかった。
夏葉意外にもきいていた人がいたことを

「おぃ星輝。
待てよ！」

「1人にさせてくれよ。」

葵と雪実を止めきれず屋上にたどりついた時にきこえたのが
ちょうどその声だった。
引き止めないってことは
別に好きじゃないってことだよな

1人歩きだした。
屋上には杏達がいるため星輝は仕方なく保健室に向かった。

「くそっ
情けねぇ…。
杏が俺を好きじゃないことぐらいわかってたくせに。」

わかってたけど実際に言われた言葉は星輝の胸を大きく傷つけた。

「…あら星輝くんどうしたの？」

「ベッド借ります。」

星輝に普段の明るさが無いとわかった保健医は何も言わずにうなずき
カーテンを閉めてくれる。
ちょうどカーテンが閉まったとき
堪えていた涙がこぼれおち
頬をつたっていった…。

「失恋って痛いんだな…。
俺はこれからどうすれば良いんだろう。」

布団にくるまりながら頭を抱えていた。
どれくらいの時間がたったのかなんて考える余裕もなく
心地良い静寂が星輝の横をすぎていく。

「星輝くん鞄持ってきてもらったから
帰りたい時に帰りなさい。」

「ありがとうございます。」

今日杏と帰れるほど俺は強くない。

星輝が屋上を去ってから担任が４人を教室に連れ戻した。
その時杏は覗かれてたことを知り
星輝がきいていたことを知った。
こちらもまた会いたくない

そう思ってしまったのだった…。

星輝は鞄を受けとるとすぐに家に帰ることにした。
自転車に乗り後ろをみる。
もちろんそこに杏の姿はない。
わからねぇよ
すでに生活の一部になってる
お前の傍にいる
それこそが俺の望むこと

家に帰ってからもずっと考えていたが
それしか答えは見つからなかった。
だったら
俺は友人としてこれからも一緒に居続ける。

ふと葵に言われた言葉が頭をよぎる。

〜お前杏ちゃんとどうなりたいんだ？〜

あの時は傍に居るだけで十分だと思ってた
でも残酷なことに
無理だと思えば思うほど関係を求めてしまう。
そうか俺は杏の特別になりたかったんだな…。
たった1人の特別に

翌日
きっと迎えに行かなければ
俺たちには見えない距離が増える。

そんなの堪えれない
だったら気まずくても迎えに行くしか道はない。
少し憂鬱な心持ちで自転車をだし
家を出ようとすると

「おっす！」「おはよ」

2つの重なった声が聞こえる。

「お前ら…。」

葵と雪実は朝早くから星輝の家の前にいた。
制服でまた二人乗りをしてきたみたいだ。

「杏ちゃんと2人は気まずいかなと思って
来てやったんだよ！
ありがたく思えよ。」

笑いながらいう葵と違い雪実は何も言わなかった。
ただ笑顔で迎えてくれた。
こんなに2人の大切さを実感したことはあっただろうか？

「さんきゅ。」

少し憂鬱が晴れた気がした。

3人で杏の家を目指す。
あえて2人は何もきいてこない。
話は高校のこととか
部活とか

日常生活のことばかりだった。
でも何か話題が出るたびに頭の中で杏と繋がる。
夏葉お前もこんな気持ちだったのか？
同じ高校に通える嬉しさ
そして同じくらいの苦しさ

「星輝？」

「えっ！？」

いつの間にかボーっとしてたのか2人が心配そうな視線を向けてくる。
心配かけちまった
しっかりしなきゃな
俺たちにはまだまだ終わらない続きがある。

「星輝、私たちだけで迎えに行こうか？」

気をつかってくれているのはわかる
けど俺は…

「そんなん優しくしたら星輝がくだらない男になっちまうだろ！」

「そんなの別に良いじゃない。
葵にはわかんないんだよ。」

雪実も葵も俺のために言い合ってくれてる。
嬉しいけど俺はイヤだ。

「2人ともさんきゅな。
でも俺は大丈夫だ。
俺はくだらない男にはならないよ。」

「星輝…。」

何てことをしてる間に杏の家についた。
毎日押してきたベルがいつもの何倍も重く感じる。
あと少しが押せない
震える指に2人の手が重なり音がなる。

ピーンポーン

音がなるとすぐに杏が出てくる。
今までと変わらず後ろに乗せる。
手が腰にまわされて
杏の温もりが背中に伝わる。
いつものことなのに
何かむしょうに切なくて切なくて
涙が出そうになる
そんな星輝に気づいたのか
杏はボソッとつぶやいた。

「ごめんね…
ありがとぉ。」

絶対に突き刺さると思ってたけど
杏の言葉は不思議と俺のことを慰めた。

「星輝のこと普通の人よりかは特別だからね。
私の大切な人。」

同情なんかじゃなくて本心で伝えてくれてる。
特別の意味が恋愛かはわからない
けど俺はちゃんと特別になれてたんだな

「ありがとな。」

より強く腰に手が回されて
涙が出そうな心に温もりを与えてくれた。

かけがえのない貴女
かけがえのない思い出
今この時間は限りなく輝き続ける。

学校に着くまでにいつの間にか気まずさは消えていた。
いつもの俺たちって感じだった。

時間はあっという間に過ぎていき
卒業式もあっという間だった。
最後に杏も俺も沢山の告白をうけて涙に包まれて学校を卒業した。
春休みは高校の準備とかですぐ終わり入学式がやって来る。

「おはよう」

「おはよう、高校でもよろしく。」

高校になっても俺の朝の日課は変わらない。
入学式から視線を集めながら2人乗り登校
高校は少し遠いけど広くて自然が多くて素敵だった。
ここで俺らの新しい生活がはじまる。

「生徒会長から新入生への挨拶です。」
進行の先生の紹介で生徒会長が舞台にあがる。
真面目って感じはない。
けど何だか目を引く人だった。

「新入生の諸君。
入学おめでとう。
こんな場所から長々話す気はない。
でも1つだけ聞いてほしい。

私達の学校は勉学、部活動と
大変充実している。
けれど、ただ生活していても充実した高校生活はおくれない。
それぞれが一歩踏み出してこそ始まりがあることを覚えていてほしい。」

高校生

新しい生活
新しいクラスメイト
新しいクラブ

何もかもが変わる

きっと今とは全く違う時間がながれ始めるんだろう

けど俺らの友情と

俺の杏への気持ちに変わりはない

会長が言っていたように

全てにおいて素晴らしき一歩が踏み出せることを祈って

高校生活をスタートさせよう。

6、終わりは始まり（後書き）

よかったら意見とか言ってくださいね♪

7、開かれた扉（前書き）

高校編では私のもろタイプのセンパイが出てきます。

7、開かれた扉

「どうだった??」

「やべぇよ。
全員一緒だった!」

「マジで!?
超良い感じじゃん。」

こんな奇跡はあるわけがない。
でも何度みても
俺、杏、雪実、葵、夏葉は同じクラスの欄に名前が書かれている。

「何かさ
うちの中学から
この高校に行く人少ないから
1年はクラス一緒にしてくれるらしいよ。」

雪実がボソッと呟いた。
そんな現実言うなよって言おうとしたら
辺りがいきなり賑やかになる。

「咲夜(さくや)センパイ。
学校帰りにオシャレなカフェ見つけたんです。
よかったら放課後一緒にどうですか??」

そんなお誘いがいっぱいセンパイにかけられる。

「生徒会長すげぇモテるんだな。」

何気なく言ってみると
葵と雪実と杏は驚いた顔をしてる。

えっ！？

俺何か変なこと言ったっけ
そう思ってると葵が説明してくれる。

「藍道咲夜（あいどうさくや）センパイと言えば超有名なバスケットプレイヤーだぜ！！」

藍道咲夜…。
俺の記憶の片隅にありそうな名前

「もしかして俺らが中1の時に初めて見に行ったセンパイの試合でボロ負けした学校のキャプテン？？」

今でも詳しく覚えてる。
俺らの学校も十分強いチームだったのに全く敵わなかった。
二人がかりでも捕まえられず交わされた
背は高いし俺は初めて才能の差を感じた瞬間だった。

「何だ覚えてんじゃん！
そうそうあの強すぎたセンパイ。
俺超憧れてて藍道センパイから学べるとか超楽しみだぜ。」

「えっまさか入学式にクラブに入部するつもり??」

さすがの雪実も慌ててる。
まだ仮入部が可能な時期だから
入部する人は少ない
けど葵はすっげぇ真っ直ぐな男だ。

「バスケが気になるのはわかるけど
見学ぐらいはしたら良いと思うんだけど。」

杏が控えめに葵に声をかけると
葵は早く意見を変えた。
もう呆れるぐらい早かった。

「杏ちゃんが言うなら見学にしよっかな。」

「もう葵は…。」

雪実は少し膨れてるみたいだった。
そして少し焼きもちを妬いてそう。
もしかして雪実は…。

でも俺は何より杏が混ざれてることが嬉しくて仕方なかった。
凄く自然に葵と話せてた。
俺らはもう仲間に慣れてるように感じた。

「じゃあ今から覗きに行くか??」

「おぅ!!」

４人で向かった体育館は熱気で包まれていた。
鳴り響くボールのドリブルの音
バッシュの高い音
そして負けないピンクの声援
うるさいほど鳴り響く沢山の音が心臓と一体になったようで心地良い

「スゲー」

「だな。」

「だよな。
女のコの多さぱねぇ。」

「そっちかよ！」

雪実は思いきり葵の頭を叩いていた。
葵は痛そうなフリをしている。
笑顔がこぼれてるけど
杏が中を見て

「上から練習見れるみたいだよ。」

「だな。行こうぜ。」

葵と雪実を置いといて杏の手をとる。
階段をかけあがり上から練習を見てみる。
外からはほんの一部しか見えてないことに気がつく。

「藍道センパイ居ないじゃん！」

「だね。
案外気づかないんだね。
藍道センパイってそんなに凄いの??」

いくら有名で名前を知っていても杏は実際のプレイをみたことはない。

「スゲーよ。
俺らの何倍も強い。
センパイの凄さは同じコートにたって初めてわかる。」

1度思い出すと記憶は鮮明となる。

中1で試合を見た帰り

「何であんなに抜かれるのかよくわかんないよな。」

自分達は試合に出ていないけど
負け方が情けない気がした。
決勝戦なのに相手の半分以下の点数

「そんな強くみえたか??」

葵と歩きながら話していると偶然数人の学生が俺たちの後ろを通った。

「今日の試合イマイチ調子が出なかったし
公園で練習して帰るか。
おっと先客??」

俺らは中1の頃からあの公園で練習をしていた。
同じ中学のセンパイが来ることはないが
他校の人が来るのは
よくあることだ。

「葵、帰るか…。」

「だな。」

いつだって誰かとかぶれば逃げてきた。
勝ち目なんて中1の俺らにはないから。

「いや帰らなくて良いよ。
俺らが帰るからさ。」

この時初めて藍道センパイと話をした。
他の部員とは違い妙に落ち着いていて
冷静だった。
さすがキャプテンって感じで誰も口を挟まない。

「いえ良いです。
このコートは強い人が使うきまりですから。」

ホントは勝負で勝ったほうだけど
勝負なんてしなくても結果は見えてる。

俺らが去れば簡単にすむ話だし

「弱いなら練習をして強くなるべきだろう。
初めから強い人なんて居ないんだから。」

正しい話だった
でも今までにそんな言葉をかけてくれるセンパイは居なかった。
弱いやつはいらないとバカにされ
強いことを威張り出す。
あぁ藍道センパイの強さは人柄にあるのかもしれない。

「キャプテン。
このままじゃ話が終わりません。
ちゃんとルールに従って試合で決着つけませんか??」

やっと後輩がキャプテンに口を挟んできた。
でもその内容は無駄としか思えない。
負ける相手と戦っても仕方ないだろう

「そうだな。
それがいい。」

「えっでも…。」

止めようとした俺と葵の言葉は見事に交わされた。

「自分より上の相手と戦うのは
成長への道だ。」

そういってセンパイは腕捲りをしだす。
前髪は試合の時と同じようにバンドであげる。
「キャプテンが戦う必要はないっすよ。
俺らがかたをつけます。」

止めにはいる後輩をキャプテンは片手で制しウォーミングアップを
始める。
理想的な動き
理想的なリズム
誰もが憧れをいだき
惹き付けられる

「俺1人対2人がハンデだ。
気を使わず全力で来い！」

もうさっきまでのセンパイじゃない
戦う男の目だった

「なぁ星輝。
もう戻れない所まで来てるんだから
精一杯ぶつかろうぜ。」

諦めてるのかと思えば葵は凄く楽しそうだった。
届かないハズなのに
近づいてくれる藍道センパイは夢のような人だ。

「おぅ。
俺らの力を出しきろう。」

そうは言ったものの現実は甘くはない
ハンデがあっても点差は広がる
試合後とは思えないスタミナ
いったいどれだけ練習すればこんなに強くなるんだろう

楽しそうにドリブルをして
センパイは俺らを抜いていく
きれいなフォームでシュートをうち
ボールは綺麗にネットにおさまる。

隙がない
そう思えたが一瞬ほんの一瞬

「今だ！！！」

ガッ

「あっ！！！」

ボールを奪うとすぐに葵にパスする。
ムリをせず危ないと思えばパートナーにたよる。

「星輝いけっ！！！」

ちょっと遠いけど

今しかチャンスはない
腕の力を精一杯使ってボールを放つ。
入れ！！！
２人の思いを背負いボールがリングに吸い込まれていく。

「は、入った…。」
まだ試合は続いているハズなのに
センパイも俺らもボールも動かずに止まっていた。
「やべぇ入った。」
いつの間にか葵と星輝は抱きあっていた。
「すっげぇ嬉しいな。」
センパイは俺らに近づいてきた。
その顔は悔しそうではなく
笑っていた
「いい後輩が育ってるな。
このままいけば強くなる。
頑張れよ！」
ガキあつかいみたいに頭をクシャクシャ撫でられる。
でも何か嬉しかった
弱いけど認めてもらえたんだ。

センパイはやっぱり強い

「そんなに強い人なら私もコートに立ちたいな。」

いつの間にか長々と思い出話を杏に語っていた。

杏が話すと少しでも嫉妬してしまう。

「おっいたいた

杏ちゃん〜

今日さ藍道センパイ生徒会が忙しくて部活に来ないって。」

下にいたハズの葵と雪実がやって来る。

「そっか…。

じゃあ今日は帰るか」

「おぅ」

見学したいのは藍道センパイのプレイだ。

そう思い下に降りていくと

キャ〜〜〜〜〜

辺りがピンクの声援に包まれていた。

さっきより女のコが増えた気がする。

壁が厚くて中が全く見えない。

「藍道センパイ～」
「こっち向いて～～」
「「藍道センパイ！？」」

葵と言葉がかぶる。
どちらともなく2人は体育館の上に上がっていく。
熱い

春なのに汗が額を伝う。
消えない熱気が体育館中を満たしていた。

あの頃と変わらない
いやそれ以上か
藍道センパイの動きは凄く早くて綺麗だった。

「今日は入学式だから新しい顔が多いな。
あんなにいっぱい女のコ名前覚えれるかな。」

体育館の中に響いた言葉はまさかのタラシ発言
女のコ達は喜んでるけど
俺にとってその1言は幻滅でしか無かった。

「藍道センパイって
女好きなのか？」

雪実と杏が飲み物を買うために学食に行ったため
葵にきいてみることにした。

「よく知らないけど
高校生男子だったら普通だろ。
星輝がガキなだけだよ。」

「うるせぇ」

しばらく藍道センパイのプレイをみていると

「咲夜はいるか??」

大きな声が体育館中に響く。
メガネをかけていて知的そうな黒髪男子

「相変わらず堅いな。」

軽く息をきらせながら近づく藍道センパイにメガネ野郎は

「会長様が緩すぎるから堅くなるんだよ!!」

と言い返す。
どうやら藍道センパイを呼びに来たらしい
そういえば今日はこれないハズだったよな
ということは生徒会の人間なのか。

「あぁもう行くって」

下がる気はなさそうなメガネ野郎に押しきられ
センパイは体育館を後にした。

「杏たち早く帰って来ないから見れなかったな。」

「だな。」

その頃食堂から体育館に向かっていた杏たちは

「ちょっと杏ちゃん待ってよ。
ハァハァ…。
さすがにちょっと…。」

杏と雪実はジュースを買うとすぐに食堂から走っていた。
食堂と体育館は近そうにみえて遠かった。

「早く行かないと藍道センパイ帰っちゃうよ。
早く
キャッ」

ドンッ

何があったか全然理解出来なかった。
尻餅ついてるってことは
ぶつかったのか
ジュースは地面に転がっていた。
曲がり角ってやっかいだな
なんて考えてると
ふいに手が差し出される。

「大丈夫??」

手を差し出した人物は
体育館にいるハズの藍道センパイだった。

「あっすいません。
大丈夫です。」

差し出された手をスルーして自ら立ち上がる杏に藍道センパイは少し笑ってみせた。

「お二人さん何か俺にようだった??」

藍道センパイはわざとらしく首を傾げてきいてくる。
どうせファンか何かとかしか思われてないんだろう

「私たち、仮入部期間が終わったらバスケ部のマネージャーになりたいと思ってます。」

そう言ってもセンパイは予想の範囲内だったみたいで
驚く様子はない
まぁあれだけモテたらマネージャーになりたい人なんて山ほどいるんだろう

「なんかさうちのクラブはマネージャーの仕事が割と大変らしくてさ
ただの憧れとかで入っても耐えれないと思うよ?」

優しい言葉に隠された意味は

中途半端なやつはいらないって所だろう。
女関係や恋愛は適当でもバスケはマジだって所が伝わってくる。

「私たちはセンパイのファンではありません。
ただ純粋にバスケのサポートをしたいからマネージャーになりたいんです。
ねっ雪実？」

急に話をふられ驚きながらも雪実はうなずいた。

「ふ～ん。
割と面白いね。
俺に興味ないって真っ正直から言われたの初めてだわ。
君の名前なんていうの？？」

これはたぶん宣戦布告の合図
見極めるつもりなんだろ
だったら引くわけにはいかない。

「織田杏よ。
よろしくお願いしますねセンパイ。」

そう言って杏と雪実は体育館への道を進んでいった。

残されたセンパイ達

「織田杏？？」

さっきからきいた名前を繰り返してる会長

「どうしましたか会長？？」

副会長としては早く生徒会室に連れていきたいが
何かに心を奪われたまま仕事をしてもらっては困る。

「いや何でもない。」

「そうですか…。
じゃあ時間がおしてるので行きましょう。」

「あぁ」

ここで新しい運命の扉が開かれたのだった。

7、開かれた扉（後書き）

頑張って早めに更新します！！

8、気づかない優しさ

入学式からはや1週間。
学校にいる時は4人でいるため
これと言って仲が良い人は出来ていない。
みんなと同じくらい話す程度だ。

そうそう入学式して沢山のことを知った。
まず藍道センパイは1週間のうち半分くらいは生徒会に行くこと
この学校にクラス替えは無いこと
何でもコースずつに分けられたクラスだから替える必要はないらしい
つまり杏とは卒業まで一緒だ。

結局あれからクラブに入部した。
仮入部期間なのに入部届けを出したら顧問は凄く驚いていた。

俺らが入部届けを出したときに杏と雪実はマネージャーになった。
あぁもちろん夏葉も
マネージャーの審査は厳しいときいたが
杏と雪実は楽だったらしい
夏葉だけがお試し期間を体験していた
センパイ達が言うには藍道センパイの指示だってきいたけど
詳しくはわからない

「星輝
今日は藍道センパイ部活に来るらしいよ。」

ぼーっとしてたらいきなり声がかかる。

声の方向を見ると
そこには変わらぬ笑顔があった。

「マジで！！
昨日も来てたのに。」

「何かね新入生の実力をみる為らしいよ。」

詳しくきいてみると意外な話が明らかに　なった。
杏がマネージャーのセンパイにきいた話では
バスケ部の伝統で新入生の実力わけテストをするらしい
テストをしてそれぞれの実力にあった練習コースに振り分けるらしい。

「えっそれって抜き打ち??」

杏はコクっと頷く。
口に指を当ててるということは内緒の話みたいだ。

「今持ってる実力をみたいらしいよ。
頑張ってね。」

「おぅ
それより杏
ちょっと顔色悪くないか??」

しばらくは無かったが杏は意外に病弱だからな。
初めて出会った時は熱をだし
学校帰りに体調が悪くなるし

「大丈夫だよ。
元気元気。」

だと良いけどな
今日は様子見とかなきゃ

杏からきいた実力わけテストの話を昼休みに葵にしてみた。

「あぁ俺も朝雪実からきいた。
それも大変だけど
マネージャーも大変なんだな。
昼休みまで仕事とか。」

そう最近昼休みは野郎だけの虚しい飯になっている。
忙しいのはわかるが体調が心配だ。

「なぁ星輝
夏葉とはどうなんだ??」

女がいないのを良いことに
葵の話題は
女関係ばかりだ。

「別に普通だよ。
中学と変わらない。」

そう言うと葵は夏葉の話をしはじめる。
相変わらずよく知ってるやつだ。
どこから聞いてきてるのか。

「なんか夏葉モテてるらしいぜ？
杏ちゃんと雪実は
俺らがいるからガードが堅いけど
夏葉は誰からみてもフリーだからな。」

杏は俺のガードがあるけど…。

「雪実は別にガードしてないだろ。
あっ葵は嫌だよな。
雪実に彼氏出来るの。」

ニヤニヤして言ってやると
葵は珍しくうろたえている。
箸からオカズをおとし
口をあけて
純粋にすげぇ面白い。

「ばかっ
そんなんじゃねぇよ。」

葵が女関係で慌てることは今まで1度も無かった。
何で気づかなかったんだろう

「早く言ってしまえば??
雪実もたぶん…。」

そう言ってやると葵は寂しそうな顔をした。
初めてだ
こんな自信がない葵

「雪実はたぶん
俺の兄貴が好きなんだよ。
昔から兄貴の後ろばっかり追ってた。」

そういえば葵の家族構成や
2人のことってあんまり聞いたことが無かったな。
2人とも恋とかしなかったし
悩んでる姿もあんまり見なかったし

「お前兄貴いたのか??」

「今更だな。
いるぜ。
でもな大学も就職も東京だからさ。
だからあんまり帰ってこない。」

もし葵の言ってることが正しかったら
雪実はどれだけ切ない恋愛をしてきたんだろう
会えない恋
そして葵も兄貴に恋してる雪実を見続けてきたのか
そう思うと何て声をかけたら良いかわからなかった。

「同情はやめろよ。
俺は雪実が誰を好きでも諦められないから
今も恋してんだよ。」

切ない顔をしてるのに今日の葵は1番かっこいい。
男らしい
だったら応援するしかない

でも俺は雪実もまんざらじゃないと思うけどな

放課後になると
すぐにクラブにいく
抜き打ちでも出来るだけ練習をして挑みたい
練習をしているといきなり藍道センパイが入ってくる。

「知ってるやつもいるだろうが
早速実力わけテストを開始する。」

名前を呼ばれた順に
体力テスト
シュートテスト
ドリブルと
次々にテストを受けていく。
最後は
3人ずつのチームにわかれて
センパイと試合をさせられることになった。

いざ試合にと思った
その時

バンッ

「大変です。
杏ちゃんが倒れちゃって！！」

部室掃除をしていた雪実がいきなり体育館に入ってくる。

「杏が！？」

「私たちじゃ運べないし。」

出ていこうとした星輝の手が掴まれる。

「俺らの誰かが行くからお前は行くな。

実力わけテストで怪我以外の棄権は１つでも全部が０になる。」

今までの成績は１番だった。

だから藍道センパイがわざわざ止めてくれる。

でも俺は…。

「すいません！」

センパイの手を振り払い雪実の後についていく。

捨てれないものがある

「星輝のスコアは０だ。」

走る背中に藍道センパイの声が聞こえた気がした。

その声は凄く寂しそうにきこえた。

「杏！」

部室には杏が苦しそうに倒れていた。

やっぱり体調悪かったんだな

目を離さなきゃよかった

「星輝…何で……？？」
お姫様抱っこされながら杏がきいてくる。
「しゃべんな。
寝とけよ。」
「…ゴメンね。」
聞きたかったのは
そんな言葉じゃないのに
杏はそれ以外話さなかった。
保健室に着くと保険医は居なかったから
雪実にまかせて星輝は体育館に戻った。
体育館ではすでに実力わけがされていた。
星輝が藍道センパイに指差された場所は体育館の隅っこで
初心者コースって感じだった。
マネージャーにドリブルを学んでる。
「そのコースにいる限りレギュラーはまずとれない。
上がりたかったらせいぜい反省して
ドリブル練習に励むんだな。」
どちらも捨てれない物だった
でも俺は杏を選んだ
杏を助けれたことは嬉しい
けどこの犠牲は
俺にとって絶望だった

バスケが好きで好きで仕方ないのにドリブルしか出来ない。
葵はコートでセンパイ達と練習している。
俺も向こうで練習したい
けどコートの数には限界があるため初心者コースにコースは与えられない。

「藍道センパイ俺にもう1度チャンスをください！
評価は厳しくて構いません。
だからチャンスを。」

気がついたら藍道センパイに頭を下げていた。
視線なんて気にせず下げた
でもセンパイは俺のほうを一目みると
練習に戻ってしまった。

この日はもぅ諦めることにした。
何度言っても聞く耳は持ってくれず
ドリブルをするしか無かった

練習帰りに保健室によると杏は少しマシになったみたいで
ベッドに座って雪実と話をしていた。

「もぅ大丈夫か？」
聞くと杏は悲しげに笑った。
何か後悔をしてそうな顔

帰り道でも杏の表情は変わらなかった。

でももっと気にしなきゃいけなかったのは

そんな2人を見ていた視線だった。
嫉妬にまみれた目
彼にもきっと捨てれない何かがあるのだろう

翌日
放課後になると杏の姿は無かった。
クラブには藍道センパイも杏もいなく
部員達はいつも通り練習していた。
たぶん藍道センパイは生徒会で
杏は帰ったのかな

一言ぐらい言ってくれてもいいのに
なんて星輝が考えていたころ

杏は生徒会室にいた

「星輝にもぅ1度チャンスをあげてください。」

雪実に倒れてる間の話をきいた杏はずっと悔やんでいた。
自分が素直に帰っていたらこんな事にはならなかった。
星輝のチャンスを私が潰したんだ。

「何度も言ってるだろ。
意見を変えるつもりはない。」

もぅ何度言ったんだろう
仕事をしている藍道センパイを無視して10回以上言い続けていた。
オッケーをもらえるまで帰るつもりはない。

「私が悪いんです。
星輝は悪くありません。
だからだから星輝にチャンスを。」

藍道センパイは机に向かいひたすら仕事をしている。
他の生徒会役員は時々冷ややかな視線を向けてくるものの
仕事を1番に優先していた。
そんな重苦しい空気の中で
藍道センパイがやっと顔を上げてくれた。

「君は星輝の彼女なのか？」

いつまでも言い続ける杏をみて会長は誤解したらしい
星輝は杏の彼氏であると
確かにそれだとつじつまがあう

「違います。
星輝は特別な人ですが彼氏ではありません。」

強い視線が杏の目に向けられる。
しばらく外れない視線
蛇に睨まれたカエルの気分だ
でもやっと視線はずらされ冷ややかな笑みをおみまいされた。

「ふっ…。
特別な人ねぇ。
お前の意見をきいてやってもいい。」

「ほ、ホントですか??」

いきなり意見を変えた会長を不審に思うも
素直に嬉しかった
やっと通じたんだって思った
でも現実はそんなに甘くはない

「ただし条件がある。
俺の専属マネージャーになれ！」

専属マネージャー？？
きいたことのない言葉だった
会長に頼まれた仕事だけをするのかな？
なんて頭の中で巡らせていると

「専属マネージャーとは…」

いきなり副会長が説明を始めた。
親切な副会長に感謝して素直にきくことにした。

「専属マネージャーとは言い換えれば専属秘書のようなものです。
会長のスケジュール管理や手伝い
そして会長の為だけにマネージャーをしてもらいます。」

意味はだいたいわかるけど
ただの学生に甘やかしすぎではないだろうか？？
なんて考えてると副会長が察してくれる。

「会長は大変ルーズです。
しかし私たちがいちいち呼びにいくヒマはありません。
なので専属マネージャーが必要なんです。

まぁ1年生に勤まるとは思いませんが…。」
この人は親切なのか邪魔したいのかよくわからない
でも1年生だからとかで1くくりにされるのは大嫌いだ。
○○だから出来ないとか
そういう考えを持ってる人も大嫌い
何でも決めつけるのは止めてほしい。

「それで星輝にチャンスを与えてくれるなら喜んでなります。」

紛れもない私の本心
でももぅ星輝の為にタオルを渡すことも
スポーツドリンクをつくることもない
そして部活中の貴方を見れる時間も減る。
杏が望む特別な人という枠から今にもはみ出そうな気持ちがここにあった。

「じゃあこれマニュアルとスケジュール帳な。
細かいスケジュールは別として大まかなスケジュールは書いてあるやつの繰り返しだ。
」

藍道センパイが引き出しから取り出したマニュアルを開くと
可愛い文字で
それぞれの日の動きが授業から放課後まで書かれていた。
それだけではなくタオルやスポーツドリンクの好み
使うシップ
マネージャーとしての細かなことも書かれていた。
私今からこんなに沢山のこと覚えるんだ…。

「あの…。
専属マネージャーを引き受けるのは良いんですが
星輝には黙っててください。
私が専属マネージャーになった理由。」

星輝はきっと自分の為って思ったらわざわざ取り下げてでも
私の自由を求めてくれそう
ある意味私と星輝は似ている
特別だと思うから相手の為に何かがしたくなる。

「わかった。
そのことに対して俺は何も言わない。
でもな専属マネージャーになったという事実はすぐに知れわたる。」

「どういう意味ですか？」

杏がきいても会長は答えてくれず仕事を再開するだけだった。
内容が気になる杏にまた副会長が口を挟んでくる。

「余計なものが集まってくるってことです。
まぁじきにわかります。」

全く意味がわからない答えに杏はしばらく首を傾げていた。

こうして星輝の知らぬ間に
また新たな扉が開かれたのだった。

体育館で汗をたらしながらドリブルに専念する星輝には

そんなことわかるハズが無かった…。

9、残酷な事実（前書き）

いきなり2話どどんと更新です（＊´∇｀＊）
ペースよく更新出来ると良いんだけどな（´・ω・｀）

9、残酷な事実

1人で帰る放課後は久しぶりだった
専属マネージャーは明日からだが今日は準備期間と言われて、クラブには立ち入り禁止にされた。
学校から家までってこんなに遠いんだ。

自転車に乗って駆け抜ける景色と比べて、1人で歩く景色は色褪せて見える。
今更ながら感じる星輝の大きさ
大切だからこそ守りたい
そんな思いが杏を動かしていた
そして心の奥底に眠る本当の意味での特別な人

「今ごろどうしてるんだろう…。」

心の中で呟いた言葉は心の中だけでは納まらず
おもわず口からもれる。
星輝との生活は凄く楽しくて
凄く嬉しい
でも比べてしまう
貴方との違い
今の貴方もこんな思いしてくれてるのかな。
それとも急に訪れた別れを怒ってるのかな。

家につくとベッドに寝転びながらマニュアルをひらく。
明日は部活の日か…。
星輝の前で私はセンパイに尽くすんだよね。
隠したくても

きっと明日には広がってる。
でもきっと耐えれるよね。
大切な貴方を守るためだもん。

星輝は部活が終わると自転車を取りにいく。
自転車乗り場から偶然校舎から出てくる人が目にはいった。
その人はだんだんと近づいてくる。

「お疲れ。」

だいぶ近づいてきてやっと誰かがわかった。
ちゃんと頭を下げて丁寧に話すように心がける。

「藍道センパイお疲れさまです。」

生徒会帰りのセンパイも1人みたいだった。
なぜか一緒に帰ることになり
自転車を押しながら歩き出す。
センパイも自転車だったが横に並んで押していた。

「今日はお前に話があったんだ。
明日、実力わけテストもう1度チャンスをやる。」

急に告げられた言葉があまりにも理想的で
一瞬信じることが出来なかった。
何度も何度も頭の中で繰り返しやっと現実味がおびてくる。
すると身体は寒さを忘れ興奮しはじめる。

「マジですか??」

嬉しさを隠しきれない星輝に藍道センパイは少し笑った。
笑った顔は部活の顔と全く違った。
どんなに頼りになるセンパイでも2つしか変わらないんだよな。
笑った顔に子供っぽさが残るのは当たり前だ。

「あぁ
大事なチャンスを無駄にはするなよ。」

「はい！！」

そう言うと藍道センパイは
また明日と言って帰って行った。
それだけの為に並んで自転車を押してくれたことを思うと
凄く嬉しくなった。

家についても興奮はおさまらない。
やべぇ超嬉しい
でも今まで無視してたのに何で急に…。
何かあったのだろうか
それとも考えすぎか。
余計なことは考えず素直に喜ぶことにした。

星輝はすぐに杏にメールをした。
喜びを伝える為に

～明日もう1度実力わけテスト受けれるんだ！～

返信がすぐに返ってきた。
まるで来ることを予想してたように

～よかったね。
明日は頑張ってね。
じゃあまた明日～

返ってきたものの忙しいのか返信は素っ気なく
メールはすぐに終わってしまった。

翌日
朝杏を迎えにいくと
何だかぎこちない行動が多かった。

ぼーっとしてたり

返事は全て
「あ、うん」のみ。
何か気になることでもあるのだろうか??

学校に着いたら別の場所に用事があると言って
朝練には来なかった。
そして朝の朝礼ギリギリにかけこむように教室に入ってきた…。
何をしていたのか
気になって仕方ない星輝に気づいた葵は気をきかせてくれた。

「杏ちゃん今まで何してたの??」

走ってきたせいで乱れていた髪の毛を直していた杏は
葵の質問をきいてクシを落とした。

想像以上の慌てっぷり

「まぁ色々。」

これ以上きかないでと言われてるようで
誰もそれ以上は聞けなかった。
でも気になる気持ちは収まらなかった。

放課後になると杏は急いで荷物を片付けていた。
もしかして帰るのかと思い声をかけてみる。

「今日さ頑張るから見ててな！」

すると杏は振り向き
笑顔で首を縦にふってくれた。
帰る訳じゃないのか…。

「あ、杏ちゃん待って！
部活一緒に行こ！」

雪実が杏に気づき声をかける。

「ゴメンね。
ちょっと用事あるから後で。」

そう言って行ってしまった。

「用事って何だろうね…。」

おいていかれた雪実は凄く寂しそうに見えた。
仲間外れになったみたいに
雪実はきっと不安だったんだと思う…。
あんなことがあったからな

だいぶ前
たしか小学生ぐらいのとき
雪実は俺らともクラスメイトとも仲良くしていた。
でもある日葵と俺と雪実が3人で遊んでいるのをクラスの女子が見つけた。

「雪実ちゃんなんて友達じゃない！」

「そうだよ。
私葵くんが好きだったのに。
ひどい」

そんな女子の嫉妬を思いきりくらった。
その日から雪実は登校拒否になった。
学校に行こうと言えば泣き出し
俺にはどうしようも無かった。

でも葵は違った。
1人1人に誤解だと話して
雪実のことを守った。
そして毎日雪実を元気づけ続けた。
その時から雪実にとって葵と一応俺も特別な人になった。

「雪実大丈夫だって。
ただ用事があっただけだって。
今日は俺と葵と行こうぜ！」

わざとらしく明るく言ってみせた。
すると雪実は不安そうに頷いたのだった。

体育館に当然杏の姿は無かった。
でも昨日頑張ってねって言ってくれた。
来てくれるって信じてる。

そう思い練習にのぞむ。
藍道センパイまだかなっと思ったその時

「ちゅ～す！
みんなお疲れ
今日はまず専属マネージャー紹介するわ。」

センパイ達が騒ぎ出す。
頭に??を浮かべる俺らにセンパイ達が教えてくれる。
俺らも専属マネージャーに興味を持った。
藍道センパイが専属マネージャーにしたほどの女の子がいったい誰なのか気になる。
ふいに杏のことが頭に浮かんだが
そんなハズないと首を横にふった。

「あらためまして織田杏です。
藍道センパイの専属マネージャーになりました。
よろしくお願いします。」

驚く人
悲しむ人
俺はもっともっと一言では表せない気分だった…。
なんで杏が！？

「じゃあ星輝の実力わけテストをするか。
杏
記録の用意を頼む。」

杏と呼ぶセンパイの声が
凄く甘く感じる
俺以外呼び捨ての奴なんて居なかったのに…。
激しく感じた嫉妬はおさまることを知らなかった。

「はいわかりました。」

そう言って杏は俺に近づいてくる。
通りすぎるだけ
そう思ったその時
指先に一瞬の温もりを感じた。
温もりは突然の出来事で着いていけない俺を、現実に引き戻した。

「気にしちゃダメだよ。
集中集中。」

愛しい
記録用紙を取ってセンパイの方へ向かう杏を止めたくて仕方なかった…。
全てを捨ててでも抱きしめたい

センパイの方になんて行くなよ！って
でも俺にはそんな勇気は無かった

実力わけテストは順調に進み最後のテストになる。
ホントなら3対3で試合をするのだが
わざわざ他のメンバーの邪魔は出来ない。
なので急遽俺と藍道センパイの1対1の試合をすることになった。

審判はもちろん杏
得点には雪実がつく
杏は試合を一生懸命みていた。

「どうなるんだろう。」

そんな杏に雪実が近づいていく。

「星輝がどこまでくいつけるかだよね。」

2人で静かに試合を見守ることにした。

あぁやべぇ
やっぱ藍道センパイつえー
全く隙がないじゃん。
だいぶ前に戦ったときより守備が固くなってる。
でも星輝は諦めずボールに手を伸ばし続けた。
あの時みたいに

一本でも…。
今だ！！
ドリブルのリズムを崩した隙に手を伸ばす。
あと1センチ
「あ！」
体育館の沢山の視線がボールに集まっていた。
「残念でしたー。
そんな簡単にはボールは譲れませーん。」
ドヤ顔で笑うセンパイを睨んでる間に試合終了のホイッスルが鳴った。
「試合終了ーー！」
杏の声とホイッスルを合図に
試合はあっという間で終わりをつげた。
情けないスコアを残して。
1点も取れないなんて初心者コースで当たり前か…。
星輝な半分以上諦めていた。
「お疲れさま。」
そう言って雪実からタオルとドリンクを渡された。
凄く嬉しかった
なのに杏とセンパイの姿をみると素直に喜べなかった。

椅子に座りスポーツドリンクを飲みまくるセンパイに杏が
そっとタオルをかける。
まるで彼氏と彼女みたいに
センパイと杏は悔しいぐらいお似合いだった。

いつの間にかガン見していたみたいで
目があったセンパイに軽く笑われた。
センパイは俺に近づいてくる。

きっと意味なかったとか言われるんだろう
返す言葉なんてないけどさ

「星輝今日からは俺らと同じコースで練習だ。
努力次第では1年でもレギュラーになれる。」

なんで、なんで
驚きを隠せない星輝にセンパイは記録用紙を差し出した。
確かに基準以上の成績だった。
でもまだ書きこまれてない試合の成績

「試合の成績をかけば
良いと思える結果ではありません。」

そう言うと藍道センパイは真面目な顔をした。
生徒会でもなく
部長でもなく
1人のバスケットプレイヤーとしての顔だった。

「今でその段階なら十分だ。
にしても強くなったなぁ。」

強くなった??
もしかして…

「センパイ覚えてるんですか??」

「あぁ」

センパイが戦った中で最弱だったかもしれない俺たち
そんな俺たちを覚えてるハズなんてないと思ってた。
ちゃんとした試合でもないのに…。

「初めからわかってたんですか??
俺らだって。」

「わからなかったさ。
でもなプレイをすれば動きの個性でわかる。」

えっとさらりと凄いこと言われたような…
でも覚えてくれてたんだ
一方的な憧れだけだと思ってた
でも俺らには繋がりがあったんだ

「すげぇ嬉しいです。
これからもよろしくお願いします。」

そう言って星輝は頭をさげた。
そしてセンパイは決まりのように頭をポンポンと叩いた。

涙が出そうなのを堪えて下を向いていると

いきなりタックルされた。
誰だと思い顔をあげると今度は抱きつかれた。
「よかったな。
俺もすげぇ嬉しい。
また一緒に練習しようぜ。」
葵は誰よりもテストの結果を喜んでくれた。
葵は誰よりもライバルで
誰よりも俺のダチだからな。
この日から俺と杏のすれ違いが始まった
下校は杏がセンパイの仕事を手伝って帰るから別
登校もそんな感じで別
話せるのは学校の休み時間ぐらいだった
今日もそんな感じで全く話していない。
今日は1人遅くまで練習していたため一緒帰れる人はいない。
ちょっと寂しくなりながら自転車を取りに行った。
たどり着いた駐輪場には杏がいた。
「今日は暗いし乗ってけよ。」
センパイと杏が帰る所だったみたいだ。
「いつも言ってますが結構です！」

頑なに断る杏にちょっと嬉しくなった。
でも毎日こんなやりとりをしてるのか…。
一緒に帰ってるだけで羨ましかった。

「今日は一段と暗いしお互い早く帰りたいし。
な??」

杏の頑固さと同じくらいセンパイもしつこい。
そんなやりとりをしながら2人が入り口に近づいてくる。
急いで隠れたから
気づかれなかったみたいだ。

「ふぅわかりました。
乗らせていただきます。」

隠れることに精一杯で杏の言葉が聞き取れなかった。
今なんて言ったんだ??
しばらく見ていると杏はセンパイの自転車に乗った。

「飛ばすからしっかり掴まれよ!」

その言葉に素直に従い杏はセンパイに抱きついた。
自分だけの特権がどんどん消えていく

杏と呼べるのも
一緒に登下校出来るのも
自転車の2人乗りも
俺だけの特権じゃない

俺は杏の特別なんかじゃない

頬を軽く赤らめて抱きついている杏は俺が知ってる杏じゃない

オレガシッテル杏トハ??

何が特別で
何が普通かなんてわからない

ただわかるのは俺は所詮ただのクラスメートにすぎないと言うこと

愛しい
そう思えば思うほど
気持ちは空回りする
近くて遠い
この距離は幸せと呼べるのか??
ライバルができて初めてわかる
ホントの独占欲
ただの独占欲じゃない
1人の男として
俺は杏をこの腕に閉じ込めたかった

9、残酷な事実（後書き）

ちゃんとごちゃごちゃしてきて
星輝くんが可哀想ですね（T_T）
でも相変わらず私は藍道センパイが好き（笑）
見守ってあげてください（＊^∇^＊）
早く更新します…。

１０、２人の過去

杏とセンパイの２人乗りを目撃してから俺は杏を避け始めた。
理由はたぶん自信損失と
自分がひどく邪魔な存在に思えたから

あんなにお似合いな２人はいない
美男美女まさにそんな２人だった
ということは杏だけがモテるわけではない。
もちろんセンパイも相当モテる！

杏が絡まない俺の日常は凄くつまらない。
クラブにいても杏が気になる。
今何してるんだろうな…。

その頃の杏はというと…困っていた
仕事があるのだが生徒会室の前に
ず～っと女の子が立っている。
女の子は凄く小さくて目がパッチリしていて可愛いげのある女の子
だった。
容姿は前髪パッツンで内まきのショートカット
大きなセーターが彼女の可愛さを引き立てた
私とは正反対のまさに女の子って感じ
けどあの子がいたら生徒会室の入れないんだよねぇ

「会長、どうにかしてくださいよ。」

生徒会室では1人の役員が女の子のことをセンパイに話していた。
杏だけでなくみんな邪魔に思っていたみたいだ…。

「そんなこと言っても俺あいつ苦手なんだよな…。」

女の子に対しては優しそうなセンパイがさらりと暴言をはく。
けどみんなは驚いていない。
どうやらみんな知り合いみたいだ。

「センパイ目的なんですから
センパイがどうにかしてください。」

誰もがそうだと首を縦にふる。
彼女もまた告白者なのだろうか??
内気そうにみえても実際は違うかもしれない

「織田さんも入れずに困っていたみたいですよ。」

副会長が留目をさすように呟いた。
さすがにこれには反応して立ち上がった。

「なにぃ。
杏がか
それは困るな。」

さっさと行けとしか思わない副会長に杏はいつの間にかダシに使われるようになっている。
会長は杏の話が出れば動くから
唯一の弱点ともいうが

杏がドアをみていると中から会長が出てきた。
出てきた会長をみるなり女の子は抱きつきだす。
声はきこえないが
アプローチしてるのは確かだ。

センパイは抱きついた女の子を即剥がす。
そして女の子が何かをお願いしているみたいだ。
やがて2人はどこかに向かって歩き出した。

ダメなことはわかってたけど
ちょっとした興味本意で後を追ってみた。
たどり着いた場所は

「校舎裏??」

こんな所来たことないよ…。

「咲夜…。」

女の子の声が聞こえたので急いで身を隠す。
声には女の子気持ちが山ほどつまっていた。
愛しくて仕方ない
そんな気持ち

「そんな呼び方すんなよ。
もうお前とは何の関係もないんだからさ。」

藍道センパイの声もまた熱を帯びていた。

2人は付き合っていたのだろうか??
そしてまた女の子がセンパイを抱きしめる

「ねぇもう1度私をマネージャーにしてよ…。
私咲夜の力になりたいの。」

そういえばマニュアルは女の子の字で書かれていたっけ
あの字があの子の字で
この子はセンパイの前の専属マネージャーだったんだ

「それは出来ない。
俺には新しいマネージャーがいるし
俺に必要なマネージャーは俺を良い方向に導いてくれるマネージャーだ。
お前が持ってる気持ちは必要ない。」

また身体を離され必要ないとまで言われた女の子は
今にも泣き出しそうだった
好きという気持ちはマネージャーに必要ない
どうしてそう言えるのだろうか?

「咲夜今のマネージャーが辞めたら
私をマネージャーにしてくれる??
私咲夜が求めるマネージャーになってみせるから。」

弱そうにみえて女の子は意外に強いらしい
頑固ともいうが
ただほしいものは絶対手に入れる
そんなイメージがした

「関係ない
俺はお前とこれ以上関わるつもりはない。」

そう言ってセンパイはこっちに向かって歩いてくる。
急いで隠し場所を探したけど見つからず
センパイはやって来てしまった
でもセンパイは驚いた顔をせず杏の手をとり生徒会室まで連れていった。

「咲夜…。」

萌の切なげな囁きが背中にぶつかった気がした

「あのセンパイ…手。」

ずっと手を引っ張られてた。
もう辺りは校舎内の廊下だから繋がなくても迷子にはならない。

「あぁわりぃ。」

センパイは忘れていたのか
謝りすぐに離してくれた。
何か焦ってるの??
それとも恐れてる??

「センパイ…。」

生徒会室の中に入った瞬間

ギュッ

「キャッ」

いきなり抱きしめられた…。
センパイの鼓動は凄く早くて
耳にかかる吐息が暖かかった
なぜか誰もいない生徒会に2人の鼓動だけが聞こえていた

「あいつからは絶対守るから。
杏が星輝のために手伝ってることはわかってるし
傍に置くのは俺のワガママだと思う。
だから絶対守る…。」

あいつってたぶん前のマネージャーだよね??
確かに初めは星輝のためとしか思えなかったけど
今は違う

センパイは女の子に絡んだりして不真面目そうに見えるけど
いつもバスケットのことと
生徒会のことばっかり考えてる
練習も仕事もいつも1番最後まで残ってやってる
誰よりも真面目な人だった
センパイが守ってくれるというなら

「私は貴方の傍にいて貴方の仕事や練習を支えたいです。

私はあの子にこの仕事を譲りません。」
センパイは凄く驚いた顔をしていた。
きっと思わなかったんだろうな
私がセンパイのことを大切に思ってるってこと

「出来るだけ傍にいるから。
萌と2人になる時間は出来るだけ与えない。
あいつはさ
あんな顔してめちゃくちゃな奴だから。」

やっぱり欲しいものは手に入れる主義の人か…。
やっかいだなぁ
杏は抱きしめられながら考えてた

「センパイ私強いんですよ?
意地悪されるのには慣れてますから。」

そう言うとセンパイは笑いながら離してくれた。
この人は凄く子供っぽい笑顔の人なんだな。
そんなことを考えながら和んだ雰囲気になってる2人を
萌は外から覗いていた
可愛い顔を歪ませながら

「あっセンパイ今日はクラブに行く日ですよね??」

毎日とりあえず生徒会室に行くため忘れそうになるが
今日はスケジュール帳にもクラブと書いてたハズ

「あぁそうだな。
忘れてた。」

「何言ってるんですか。
行きますよ。」

そう言って用意をもちバスケ部に向かう。
体育館に入った瞬間星輝と目があった気がした。
でもそらされた??

やべぇ
目そらしちゃった…。
センパイと仲良さそうに笑いながら入ってきた杏
何だか俺が知らない間に2人の距離がグッと縮まった気がする。

センパイはまず副キャプテンに話をしていた。
たぶん練習のことだろう
でもそれにしては顔が強ばっている。

センパイが居る日は相変わらず外の声がうるさいな。
きゃーきゃー言う声

そんな女の子達を見ていると
ふと1人の女の子が目に入った。
部員と話せる機会が多い一階ではなく
1人2回から体育館を見渡してる
凄く可愛い女の子だった

目があった瞬間手をふられる。
俺に？
辺りをキョロキョロすると誰も気づいてないことがわかり
軽く手をふりかえす
すると
「星輝ちょっと来い！」
藍道センパイに首を腕でつかまれ引きずられファンがいないドアから外にでる。
いわゆる体育館裏って所だ
センパイは挙動不審に辺りを見渡すと小さい声で話し始めた。
「あの女には近づくなよ。」
あの女って誰だ？
もしかしてさっきの可愛い女の子？
いやでもただのファンのことをセンパイは言わないか
女たらしだし（笑）
じゃあ杏？？
嫌でもそれも違う気がする
1人考えを廻らせる星輝
「さっき手ふられただろ。
あの女だよ。
西垣萌（にしがきもえ）」
1人二階から見ていたのは何か訳があるのか…。

「あの子が何なんですか??」

「俺の前のマネージャー。」

マネージャーに近づくなってことは
どういうの意味だ??
独占欲か
それとも他に何か

「あいつは自分の欲しいものの為なら何だってする。
俺があいつを好きにならないとわかっていても
杏を狙うだろう
そしたらお前にも近づくかもしれない。
でもあいつが何か言ってもデタラメだから信じるなよ。」

杏が今近い人といえばセンパイだろ
ってことはあの女もセンパイが好きってことか

「センパイが杏を手放せば杏に危害は加わらない
違いますか??」

自分のことは知らない
でも杏が関係するなら俺はどこまでだって突っかかってやる!

「そうだな。」

当たり前だとでも言いたそうなセンパイの胸ぐらを掴む。

センパイの方が背が高いから
たいした効果はないけど
何かせずにはいられなかった

「だったら杏を解放しろよ！！」

そう言ってもセンパイは首を横にふった。

「何でだよ！！」

さらに強く掴み声をあげるがセンパイは首を横にふるばかりだった。

「俺はあいつを手放す気はない。
それにあいつも傍にいることを望んでくれた。
俺が杏を守るんだよ。」

初めて2人が正面からぶつかった瞬間だった…
センパイの目は本気そのもので
俺らが言い合って終わる話ではないことを悟った。

「わかりました。
気をつけます。」

そう言って星輝は練習に戻った。
この後たいして練習は身につかずに終わった。

「センパイ今日も残って練習するんですか？？」

みんなが帰り二人だけの体育館で杏がきく。

「あぁ
こうでもしないと上達しないからな。」
そう言いながらもセンパイはシュートを打っていた。
杏は星輝の言葉を思い出す。
～あの人の力は同じコートに入って初めてわかる～
私の力がどこまで通じるかはわからないけど
「センパイ練習付き合います。」
そう言ってボールをもち近づいていったのだった。

練習が終わり帰っていた途中で星輝は忘れ物に気づく。
1人ひきかえし体育館を覗くと
汗をかきながらプレーする杏とセンパイが目に入った。

～あいつも俺の傍にいることを望んでくれた～

センパイが言った言葉
2人は互いに必要としているんだな

星輝は自分のタオルを見つけたが気づかないフリして帰ることにした。

「お前バスケやってたのか??」

ちぇっ

所詮話す余裕があるくらいか

「ハァハァ…。

中学の間やってたから。」

とってやる絶対

そう思いセンパイのスピードに維持でもくらいつく。

ドリブルの音

汗の匂い

あぁバスケしてるんだ

そう感じた瞬間杏の中に眠る闘争心に火がつき

杏はセンパイの動きを読みボールを奪還する

この距離ならいける!

ボールに精一杯の力をこめて投げる

入れ!!

「残念だったな。

でも最後は練習してたら入ってたかもな。」

結局あのボールはネットの直前にカーブのまま床に吸い込まれていった…。

「いえ、完敗です。
少しでも敵うかもとか思った私がバカでした。」
そういうとセンパイは無言のまま後ろをむき進んでいく。
「ほら、汗ふけよ。」
差し出されたタオルは私がセンパイのために用意していたタオルだった。
軽く汗をぬぐいセンパイに渡すとセンパイは躊躇わず
そのタオルで汗をぬぐった。
今センパイに見えているのはマネージャーではなく1人のバスケットプレーヤーだった。

帰り道
2人乗りをしながら家までの道を進んでいく。
いいって言ったのにセンパイは送ると聞かなかった
優しいのか子供なのか…
「杏ちょっと寄り道していいか？」
頷きセンパイが自転車を止めたのは
それぞれの思い出の場所となっている公園だった。
「お前はどうしてバスケをし始めた？」
2人ベンチに座っているとセンパイがいきなりきいてきた。
バスケを始めたわけ？？

「たしか誰かに影響されたんです。
小さい頃に出会った…男の子。」

たしかバスケを教えてくれた
私が恋した少し年上の男の子
公園だった
出会って教えてくれて別れた
今全てのピースがはまり運命の扉がひらく

「もしかして
さーくん??」

咲夜って名前かもしれない
小3の夏休みおばあちゃんの家に来てた私は彼にこの公園で出会った
別れを惜しんで涙をながした
1週間で散った淡い初恋

「そうだよ。
やっと思い出してくれた?
杏ちゃん」

11、揺れる恋心（前書き）

遅くなってゴメンなさい（＜＿＞）
今年もよろしくお願いします（＊、∇、＊）

11、揺れる恋心

「何で今まで言ってくれなかったの??」

咲夜があの男の子だったってわかったことは嬉しいけど
今までそんな素振り見せなかった

「俺は…。
過去を気にせずお前と恋におちたい。」

さーくんだと言えば
杏の瞳にはさーくんとしか映らない
でも咲夜は咲夜として杏と恋愛をしたかったんだ

「センパイ…。
私にとってさーくんも咲夜センパイも大事な人ですよ。」

笑顔で告げると咲夜は悲しそうな顔をした。
私傷つけちゃったのかな…
ホントのことなんだけど

「俺のこと好きか??」

いきなりセンパイが視線をとらえる
腕を軽く捕まれ視線を外すことを許さない
少し横暴なのに
優しさがある

「そんなこと…。」

するとセンパイがフェンスに杏を押しつける

ガシャンッ

フェンスが揺れる音が暗い中に響く

怖い

なのに真剣に向けられる眼差しが心を乱す

抱きしめられた身体は寒さをまぎらわす。

それほどに火照って熱い

離せない視線

離せない身体

全てが私を熱くする

「あ…。」

「…だまれよ。」

気がついた時には塞がれた唇は凄く心地良い温もりだと感じていた

再会したさーくんは咲夜という大人になっていた

「杏…。

俺お前と再会した時に運命だと思った。

俺にはお前しか見えない。」

離れた唇が囁いた言葉は杏を魅惑の世界へ突き落とす

「帰るか。」

急に離れた温もりが惜しかった。

でもその気持ちを押し殺し頷いた。
自転車に乗るときセンパイの腰に手を回すのが恥ずかしくて
サドルを一生懸命持っていた
あんなこととしといて何で普通でいられるんだろう

家に着いても頭の中はセンパイばかり
星輝のことが考えられることはなかった
星輝だけが一方的に杏のことを考えていた

翌日星輝は相変わらず1人寂しく教室にいた。
朝練は何だか行く気にならず
でも家にいても何もする気にならなくて
早い朝練の時間に1人教室にいた。

あーバカらしいな
杏が俺を見なくても俺は気にしないって決めてたのにな

1人寂しくいた教室の扉が開かれる

「東山星輝くんだよね??」

ニコッと笑って可愛くて少し幼げな雰囲気がある
センパイからきいていなかったら同級生と間違えただろう
まさかセンパイとは思えない
そして性格が悪そうにも見えない

「そうだけど何ですか?」

あえて冷たく返してやる
でも萌は気にせず笑顔のまま近寄ってくる

「あのね私星輝くんと仲良くなりたくて。
星輝くんのバスケ大好きなんだ。」

少し照れながらいう萌
その演技力はまるでホントに思ってるかのようだ
この場合どう返せば良いんだろう??
嘘だろって問いつめるか
素直に信じこむか

「そうですか。
でも俺1人になりたいんで。」

あえてどちらでも無い答えを答えてやった
すると萌は少し笑顔を崩した
それが素の表情なんだろう
出来るだけ隠してるつもりなんだろう

「じゃあ今度にしよぉかな。
お邪魔しちゃ悪いしね。
また今度会いに来ますね。」

勝手に手をとり強くにぎる萌
その手から感じたのは不快感でしかなかった
身体がとっさに感じた拒否反応
星輝は軽く手をはらった。

「あ、すいません。」

さすがにセンパイだし敬語を使う。

はらわれた萌はまだ笑顔だったけど、心中穏やかではなさそうだ。

「えへへ
私こそごめんね。
驚かしちゃったよね??」

そういうわけではないけど
あえてそういう事にしておいた方が良さそうだ。
意外に短気みたいだし

「まぁそれなりに…。」

みるからに拒否反応を表している星輝に萌の笑顔が少しひきつる。

カタッ

「あっ」

誰か男子が見えた気がした
萌は誰かすでにわかっているみたいだった

「ゴメンね。
友達が来たからまたね。」

手を振って去っていく萌に星輝はペコッとお辞儀をした。
そして星輝はまた1人になった。

「萌もう止めろよ。」

さっきの男子が萌を注意する
萌の目的や萌の性格をよく知ってる相手みたいだ

「ほっといてよ。
あんたには関係ないの。
私は咲夜が手に入れば良いの。」

気にせず叫ぶように萌が告げた
男子はただ悲しそうな顔をしていた。

「関係ない…ね…。」

「そうよ！！」

それから2人は会話をせずに星輝のいる教室から離れていった

「星輝！
お前何してたんだよ。
みんな心配してたんだぜ。」

少しずつ人が集まって来た教室に
いつもより早い時間に葵がやって来る。
杏や雪見はまだマネージャーの仕事で来ていない。

「今日藍道センパイ来てた??」

こんな事きいても意味なんてないってわかってるけど
何となく勢いできいてしまう
杏とセンパイの様子を知りたい

その気持ちを葵も読みとってくれた
「センパイと杏ちゃんの様子なぁ…
何か恥じらいがあって
意識してるようにみえた。」

恥じらいなんて込められたことあったっけ??
たぶんないよな
俺は意識なんてされねぇもん
一目でわかる星輝のテンションの下がり具合

「なぁ星輝今日学校サボらね??」

高校に入ってからは1度もサボったことはなかったが
中学の時は何かあるたびにサボってた
2人ずっと公園でバスケしてたり
ただ屋上で寝てただけだったり
サボる方法は様々だが

「別に良いけど。」

「じゃあ行こうぜ。」

葵に言われて教室を出た時に運悪く杏と雪見がやって来る
杏と目があったが気にせず葵と進んでいく
振り返ると杏と雪見は足を止めていた
全てわかってる雪見が杏を慰めてる…
友達として俺は杏を傷つけたんだよな

「仕方ないだろ。

サボるのに2人は連れていけないし
雪見も杏ちゃんも真面目だし。」
杏を気にしながらも2人学校を出た
星輝も葵も自転車を押しながら
トボトボ歩き出す。

「どこ行く??」

しばらく悩んでいた葵が思いついたみたいで
いきなり自転車にまたがる。
星輝は何も言わずに葵の後ろをついていった。

たどり着いた場所は

「ここ…。」

「あぁ
最近来てなかったけど
2人でよく来てただろ。」

バッティングセンター
中学の頃センパイに怒られたり
テストが悪かったら
ストレス解消に来たっけ

「懐かしいな。」

「あぁ何があったかは知らないし
忘れられないかもしれないけど

ちょっと軽く考えろよ。」
葵の優しさが嬉しかった
葵は片思いに慣れてるから強いのかな
だったら葵も俺が知らない所で苦しんでたのか
「よしっ打つか！！」
「おう！！」
カキーンッ
「やべぇ超とんだ。」
「ストレス溜まりすぎだろ（笑）」
そんな話をしながら３０分ほど打ち続けた。
飛んでいくボール
振ったバッドが
身体を重く
そして心を軽くしていった。
「バッティングって超疲れるな。」
「だな。
腕超いてぇ。」
ベンチに腰かけジュースを飲む
熱い身体をジュースの冷たさが冷ましていく。
星輝は葵に全てを話すことにした。

互いに求めあってることも
２人で仲良さそうに練習してたことも
ついでに萌のことも

その間葵は口を挟まず静かにきいていてくれた。

「なぁ星輝。
今辛いか？？」

いきなり言われた質問は何故か星輝の胸に重くのしかかった。
辛い？？
確かにセンパイと杏をみてるのは辛い
でもまた俺は笑顔の杏と楽しい時間を過ごしたい

「辛いけど
俺は杏といたいから。」

すると葵はフッと笑った。

「俺さ昔兄貴といる雪見を見るのがイヤでさ
雪見と兄貴のこと無視してたんだ。
俺は星輝みたいに思えなかったからさ
でも兄貴に言われた
好きなら絶対離れるなって
今辛くても
いずれ笑える日が来るからって。」

知らなかった
葵にそんな時期があったなんて
葵はいつだって色んな女の子と仲良くしてて

恋愛に苦労なんてしてなさそうにみえた
でも葵は雪見の傍で辛い思いをしてたんだな

「あぁそうだな。
たとえ結ばれなくても
傍にいれば笑える日が来ると思う。」

2人で笑いあい学校に帰ることにした。

学校に着くと当然担任に怒られた
まぁ2人で怒られて怖くも何ともなかったけど
教室に戻ると杏と雪見がやって来た。
雪見は笑顔で
杏は気まずそうにしていた。

「杏、悪かったな
避けるようなことして
杏さえよかったら
これからも友達でいてくれないか？」

杏は笑顔に大きく頷いてくれた。

放課後クラブに行こうとした
その時
廊下にいる萌が目に入った
あからさま俺に手をふっている

「星輝、あの子…。」

不安そうな杏達に

先に行ってほしいと伝え、萌に近づいていく
前と違って拒絶しない星輝に萌はご機嫌みたいだ

「会いたくて来ちゃった。
ちょっとだけお話したいなーと思って。」

ニコニコ笑う萌
でも俺はもう迷わない
大丈夫だ
こんな女に振り回されることなんてない

「藍道センパイが好きなら直接アタックしたらどうですか？」

いちいち相手の顔色を伺いながら話すなんてめんどくさい
ましてクラブ前だし

「えっ！？」

さすがに萌も驚いたみたいで
少し声が低く
そして強く感じた
でもすぐに面白くない可愛い女の子の顔に戻る

「な～んだ知ってたの？？
だったら話は早いや。
杏とか言う女と仲良くしててよ。
咲夜が近づく余裕ないくらいさ。」

顔は笑ってるのに何だか雰囲気が怖い
上級生の迫力とかじゃなくて

何だろ女の醜い黒さ??

「はい、もうそこらへんにしとこうね。」

いきなり現れたそこそこ長身でイケメンな男
確かこの人どっかで…!?
あいつだ
萌が教室に来たときに迎えに来たやつ
ってことは敵か?

「純平(じゅんぺい)何すんのよ!」

純平は萌の腕を掴み無理矢理引きずっていく
萌の反抗なんて所詮無駄みたいだった

「星輝くんだっけ?
ゴメンな。
こいつ良いやつ何だけど欲しい物があると回りが見えないんだわ。」

欲しい物…
確かに萌の方法はかなり横暴だと思う
でもこれほどに意思表示が出来て
好きだと言えるのは羨ましい気もする

「いい加減離してよ!
もっと言いたいことあったのに…。」

引きずられた萌は結局自分の教室までつれていかれた。

「今日はアイス食べて帰るんだろ？
だったら早く行こうぜ。」

自分との約束を凄く楽しみにしている純平に萌は何も言わずに頷いた
純平もまた切なき思いをしている一員だった

～少し前の昼休み～
「純平ちょっと良いか？？」

純平を呼び出したのは彼の1番の親友咲夜だった
純平が連れていった咲夜の試合で萌は咲夜に惚れた
よく考えれば自業自得である

「萌のことだろ。
また何かしようとしてるのはわかってるから
止めとくわ。」

萌が女の子に嫌がらせをするのなんて
よくあることだった
だから唯一止めれる純平が萌を止めることになってる
ホントは残酷なことだけど純平は嫌だとは思わなかった

「いつも悪いな。
でも俺さ杏が本気で好きなんだ。」

親友には話しておきたい
それが咲夜の1番の思いだった

「そっか…。

頑張れよ。
俺は俺なりに頑張るからさ。」

咲夜は純平の萌への思いを知っていた
だから純平は凄いと思う
マネージャーになりたいと言った萌と、マネージャーにしたいと言った俺
どちらに文句を言うこともなく萌をマネージャーに差し出した
俺には出来ないと思う

純平のそれほどの思いを俺はすぐに踏みにじった
萌の気持ちが重いと感じマネージャーを止めさせるように追いこんだ
あの時はさすがに純平がキレて殴り合いになったな

「咲夜お前片思いしてるからか知らないけど
何か遠慮がなくなったよな。
今まで萌のことがあると
悪いなってすげぇ謝ってたのに。」

「片思いを知って切なさを知ったら
謝るより真剣に頼んだ方が良いなって思ったんだよ。」

「そりゃ良いや。」

2人はしばらく笑いあっていた

だから俺は萌の邪魔をし続ける
いやし続ける責任があるんだ

「星輝大丈夫だった??」
先にクラブに言っていた杏が星輝を見つけて心配そうに近寄ってくる
杏も萌のことを知ってるからか凄く心配してくれてる
嬉しいような情けないような

「大丈夫だって。
俺は男なんだから。」

すると杏は何かを思い出したように笑顔になった。

「そうだね。
いつも星輝は私を助けてくれる男の子だもんね。」

たとえ藍道センパイと杏が仲良くなっても
杏の中には消えない俺との思い出がある
この思い出はセンパイにだって負けない

「あれ?
今日藍道センパイは??」

杏がいるのに藍道センパイはいない。
今日は藍道センパイもクラブの日なのに

「もうすぐ来ると思うよ。」

杏がそう言ったその時

「ちゅーすっ」

藍道センパイがやって来た
相変わらずファンの女の子の歓声は凄かった
さっきアイスを食べに行くと言ってたからか萌の姿はない。
その事に情けなく安堵してると藍道センパイが近づいてくる。

「星輝ちょっと良いか？？」

また連れていかれた場所は体育館裏
まぁファンが居ない場所はここぐらいだしな

「萌が星輝に近づいてるらしいな。」

まさかセンパイは、その事を杏から聞いたとか？

「誰から聞いたんですか？」

「純平だよ。
あいつが困った様に言ってたからさ。」

よかった
杏がセンパイに助けを求めてたなんて男として情けなさすぎる

「わるいな。」

軽く謝罪するセンパイ
たぶんセンパイにもどうにもならないんだろう

「俺は大丈夫です。
ただ好きな女…杏を守りたいだけなんで。」

センパイに譲る気はない
って、ちゃんと伝えてやった
負けねぇもん

「俺だって譲る気はないぜ？
杏は俺の初恋の女の子だもん。
もちろん杏の初恋は俺だし。」

杏とセンパイが出会ったのは高校じゃないのか？
確かにセンパイの杏へのアプローチは早いとは思ってた
すぐにマネージャーに指名したし

「初恋って？」

震える手を押さえつけおそるおそる声を出す

「話してないのか
俺らの出会いは小学生の時だ。
昔に出会って別れて
見事再会。
運命みたいだろ？」

何だよそれ…
杏の初恋がセンパイ？
嘘だろ
じゃあ杏はずっとセンパイへの思いを引きずっていたのか？

星輝の杏への思い

が、揺れる中

葵の雪見への思いも揺れていた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2036x/

運命の扉

2012年1月6日20時48分発行